



NEWS LETTER

演劇映像学連携研究拠点

February 2014

Number. 4

共同利用・共同研究拠点

「演劇映像学連携研究拠点」

活動総括

拠点代表 竹本幹夫

2009年度に開始された本事業も2014年3月で完結する。拠点報告の冒頭に、5年間にわたる活動を総括する。

2009年、6号館221教室に拠点を設置し、過半が学外委員によって構成される運営委員会を結成して、初年度より6件のテーマ研究、12件の公募研究を実施、以後、継続の必要な研究については逐次テーマ研究の拡大をはかり、最終的には9件のテーマ研究と10件前後の公募研究を毎年実施した。テーマ研究については、拠点リーダーより運営委員会にこれを諮り、また公募研究の採択は運営委員会にこれを一任した。その研究内容は、演劇・映像の両分野にわたり、古典と現代とを問わず、日本・中国・欧米・南米・東南アジア・西アジア・中近東に及ぶ、広汎な時代・領域をカバーするものとなった。

この研究に参加した研究代表者・分担者はほぼ100名に達し、同数の研究協力者もこれに関わった。関連する研究者コミュニティ・学会も多岐にわたったが、座・高円寺やF/Tユニバーシティといった、演劇活動の現場との連携が実現し、東京芸術大学や東京文化財研究所、東京国立近代美術館フィルムセンターや日本大学芸術学部などの、研究機関部局やスタッフとの共同研究もあった。これらの活動を通じて、第一線の研究者が演劇博物館の研究活動に参集したのであり、これは21世紀COEやグローバルCOEのような大型人材育成事業とは異質の、純研究的な事業として、きわめて意義深い。本事業により、演劇博物館は人材育成と研究という両輪を完備することになったわけである。

以下に年度毎の成果のデータを示す。最終年度である本年度分の

詳細については、後掲の年次報告を参照されたい。

2009年度には、拠点主催の公開シンポジウム1件、拠点主催の成果発表会（年度末）、および報告書のホームページ上での公開（平成22年度にアップロード）を行った。テーマ研究・公募研究別の個人による成果発信は、単行本7件、論文44件、研究発表・学術講演68件、資料紹介等5件、講演会・ワークショップ・国際シンポジウム・公開研究会等26件、データベース化9件、その他である。

2010年度には、拠点主催の事業としては、公開シンポジウム3件、各共同研究チームの代表者による成果発表会（年度末）、報告書のホームページでの公開（前年度分を翌年度5月頃）等を行なった。また、拠点の活動の概要を学外に向けて広報するパンフレット、前年度の成果を伝えるニューズレター、拠点主催シンポジウムの報告書2冊を発行し、国内・国外の関係各所に発送した。さらに演劇博物館紀要『演劇研究』への論文投稿を受け付け、審査を経て若干数の論文を掲載した。海外演劇論の翻訳データベースも年度末にアップロードを行った。テーマ研究・公募研究の個人による成果発信の内訳は、単行本3件、論文54件、研究発表・学術講演72件、資料紹介等5件、講演会・ワークショップ・国際シンポジウム・公開研究会等59件、データベース化3件、その他である。

2011年度には、拠点主催の事業はなかったが、拠点予算で研究チームの開催した海外での研究集会1件と、日本演劇学会との共同開催で「災害と演劇」シンポジウムを開催した。これらも含め研究会の実施数は85件を数える。また前年度の活動内容を伝えるニューズレターの他、著書3件、論文93件、研究発表83件（海外学会分も含む）、招待講演・シンポジウム16件、その他5件である。翻訳データベースにもラテンアメリカ、東南アジアの演劇論を中心に14件の新データが加えられた。

2012年度は、ストラスブール大学・アルザス欧州日本学研究所との共催による国際シンポジウムを含め、研究会の実施数は総計79件を数え、内4件が国際研究集会である。この年度の研究業績は、単行本1件、論文65件、研究発表83件、資料紹介1件であった。翻訳データベースにも17件の外国語文献の翻訳が新たに加えられた。

2013年度はテーマ研究の中の8件が、11月以降に独自に研究集会・国際シンポジウムを開催もしくは開催を予定し、1件は年末の成果発表会で研究発表を行った。公募研究は13年末までに6件の研究集会が行われ、今後も開催を予定するチームがある。

この間、本研究プロジェクトにご参加下さった各位には、この場を借りて深甚の謝意を表す。また本拠点を支えた、拠点・演博スタッフ各位にも感謝する。
(演劇博物館館報より転載)

contents

■「演劇映像学連携研究拠点」活動総括	1 p
■シンポジウム	
「いまだ知られざる寺山修司 ―ドキュメンタリーとフィクションのはざまから―」	2 p
■研究講演会	
「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」	3 p
■「翻訳プロジェクト」公開原稿一覧	4～5 p
■「翻訳プロジェクト」シンポジウム	6 p
■平成25(2013)年度 テーマ研究成果報告	7～15 p
■平成25(2013)年度 公募研究成果報告	16～20 p
■過去の公募研究一覧	20 p

シンポジウム「いまだ知られざる寺山修司 —ドキュメンタリーとフィクションのはざまから—」

テーマ研究「寺山修司の創作～一次資料から明らかにする活動実態～」

研究代表者 岡室美奈子

演劇博物館は田中未知氏による寺山コレクションの寄託を記念し、企画展「いまだ知られざる寺山修司」展を2013年11月26日から早稲田大学125記念室(大隈タワー26号館10階)にて開催した。田中氏により寄託された資料は、寺山の自筆原稿、演劇・テレビ・ラジオ・ミュージカル等の台本、写真、書簡、書籍、録音テープ、レコード、海外公演の記録等だけでなく、演出・上演メモや高校・大学時代の自筆ノートなどが含まれている。テーマ研究「寺山修司の創作～一次資料から明らかにする活動実態～」では、この貴重な未発表資料を用い、特に20代までの初期の創作活動に注目し、新たな寺山像を探求すべく共同研究を行い、演劇博物館での展示に合わせて大規模なシンポジウム、および複数の関連イベントの開催を行った。

2013年10月27日に開催されたシンポジウム「いまだ知られざる寺山修司—ドキュメンタリーとフィクションのはざまから—」では、まず第1部において、扇田昭彦氏、梅山いつき氏を聞き役に、秘書兼マネージャーとして寺山の仕事を見過してきた田中氏より当時の寺山の姿が豊富なエピソードとともに紹介された。また第2部では、寺山が構成に関わった2本のテレビドキュメンタリーが実際に上映され、その実験的な手法をスクリーンで検証することができる貴重な機会となった。最後に第3部では、ドキュメンタリーの上映を受け、今野勉氏、秋山浩之氏、松井茂氏、長谷正人氏、岡本美奈子氏によるパネルディスカッションが行われ、寺山に関わったテレビ番組の特徴やその時代背景、映像と演劇、記録性と作為性、ドキュメンタリーとフィクションの境界を横断する創作活動、そしてテレビというメディアの特性そのものを

を浮かび上がらせるような演出のスタイルについて議論が交わされた。当日は会場からは枝裕和監督も参加されるなど、活発かつ刺激的な議論が行われ、盛会のうちに幕を閉じた。シンポジウムの概要は以下の通りである。

◆会期 2013年10月27日(日)

◆会場 大隈記念講堂

◆プログラム

〈第1部〉田中未知氏に聞く——1970年代と寺山修司

話し手 田中未知

聴き手 扇田昭彦(演劇評論家)、梅山いつき(早稲田大学非常勤講師)

〈第2部〉寺山修司構成によるテレビドキュメンタリー上映

『中西太 背番号6』(1964年放送、TBS)

『あなたは…』(1966年放送、TBS)

〈第3部〉パネルディスカッション

登壇者

今野勉(テレビマンユニオン)

秋山浩之(TBS)

松井茂(東京藝術大学)

長谷正人(早稲田大学文学学術院教授)

岡室美奈子(演劇博物館館長)



第1部 田中未知氏に聞く(左から扇田氏、田中氏、梅山氏)



第3部 パネルディスカッション

また展覧会会期中には共同研究チームによる共催で、以下の3つの関連イベントが開催された。まず12月3日、12日には展覧会会場において田中氏によるギャラリートークが行われ、これまで語られてこなかった寺山の一面を知るべく、多くの来場者が集った。また寺山の映像、演劇作品を現代的な視点から再検討していくための試みとして、12月11日に鼎談「テラヤマシュージ・リローデッド!」が小野記念講堂で開催された。パネリストとして劇作家・演出家の宮沢章夫氏、批評家で文学学術院教授の佐々木敦氏、共同研究チームからは岡室美奈子氏が参加した。最後に12月19日には、文化構想学部幻影論ゼミの学生によって、寺山の初期の作品である『毛皮のマリー』のリーディング公演が125記念室にて開催された。



鼎談「テラヤマシュージ・リローデッド!」

こうした一連の展示、上映、シンポジウムやトークイベント、そして学生の演出によるリーディング公演によって、寺山修司とその作品が持つ可能性に新たな角度から光があてられることになった。今回寄託された膨大な未発表資料群と共同研究の成果が、今後の寺山研究に与える影響はきわめて大きいものとなるだろう。また多面にわたる寺山の創作活動に迫るプロセスのなかで、映像研究と演劇研究の交錯が随所に見られたことも、特筆すべき成果であると言える。(大久保遼)

研究講演会

「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」

テーマ研究「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」

研究代表者 入江良郎

演劇博物館と東京国立近代美術館フィルムセンターは、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」を記念して、2013年11月2日、3日の2日間に渡り「伝説の映画コレクション 早稲田大学演劇博物館所蔵フィルム特別上映会」をフィルムセンター大ホールにおいて開催した。演劇博物館は1928年の開館以来、演劇資料の収集のみならず、早くから映画フィルムの収集にも取り組み、ユニークなコレクションを構築してきた。とくに1970年にフィルムセンターが開館する以前のフィルム保存に演劇博物館が果たした役割は大きく、演劇史においても、また映画史においても大変貴重なフィルムを数多く所蔵している。今回の上映会ではこれらのコレクションのなかから、明治大正期に作られた「櫻田血染ノ雪」(1909年)、「松王下屋敷」(1910年)、「浮き世」(1916年)、「雷門大火 血染の纏」(1916年)などの初期日本映画や、世界的に見てもめづらしい「闇の力」(1924年)、「野鴨」(1926年)といったドイツ無声映画、第二次大戦中に日本映画社ジャカルタ製作所によって製作された宣伝映画「時かざれば」(1944年)、「驟雨」(1944年)などがフィルムで上映された。上映されたフィルム11本のうち9本は、テーマ研究「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」の共同研究チームによりニュープリントが作成された作品である。

会期中の11月2日には、共同研究チームによる研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」が開催され、5年間にわたる共同研究の成果報告が行われた。各講演では、多様な角度から演劇博物館の所蔵フィルムや映画収集のプロセスについて検討が行われ、フィルムの内容や歴史的な位置づけのみならず、映画研究、演劇研究双方の専門家が共同で研究を行っていくことの意義もまた浮き彫りにされた。こうした研究成果は、演劇博物館とフィルムセンターという、日本における映画の収集・保存において代表的な役割を担ってきた2つの機関が共同研究を行うことによってはじめて可能になったものであり、映画史、映像研究のみならず、演劇史やその他の文化に関わる研究領域に対して非常に大きなインパクトを与えるものであると言える。当日はフィルムセンターの大ホールが満場の聴衆で埋めつくされるなど、研究者のみならず、一般の来場者の関心もきわめて高いことが

うかがえるものとなった。講演会の概要は以下のとおりである。

- ◆会期 2013年11月2日(土) 14時から16時
- ◆会場 東京国立近代美術館フィルムセンター 大ホール
- ◆プログラム
 - 竹本幹夫(早稲田大学文学学術院教授)「映像学連携研究拠点について」
 - 入江良郎(フィルムセンター主任研究員)「調査研究プロジェクト「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」について」
 - 上田学(日本学術振興会特別研究員PD)「演劇博物館所蔵の無声映画コレクション」
 - 児玉竜一(早稲田大学文学学術院教授)「初期日本映画と歌舞伎、および女優たち」
 - 板倉史明(神戸大学大学院准教授)「『旧劇』映画における物語叙述のスタイル再考『雷門大火 血染の纏』(1916)を分析する」
 - 岡田秀則(フィルムセンター主任研究員)「日本映画社ジャカルタ製作所の活動について」
 - 金子健(文化庁文化財部伝統文化課芸能部門文部科学技官)「六世中村歌右衛門旧蔵記録フィルムについて」

(大久保遼)



上映された「櫻田血染ノ雪」(1909)の一場面



会場の様子

竹本幹夫氏

入江良郎氏

上田学氏



児玉竜一氏

板倉史明氏

岡田秀則氏

金子健氏

翻訳プロジェクト

「翻訳プロジェクト」公開原稿一覧

《はじめに》

竹本幹夫「ご挨拶」(2010年度)

鴻英良「翻訳プロジェクトについて」(2010年度)

秋葉裕一「活動の概要」(2011-2012年度)

鴻英良「ご挨拶——翻訳プロジェクトの新たな展開に向けて——」
(2013年度)

ヨーロッパ世紀末転換期演劇論

ドイツ

〔解説〕谷川道子「ドイツ19世紀末転換期の演劇事情とテキスト解説」

オットー・ブラム、ゲーアハルト・ハウプトマン「往復書簡」(1889)
(版權の関係上、演劇博物館紀要『演劇研究』第35号に掲載)
訳: 本田雅也

オットー・ブラム「現代生活のための自由舞台—創刊の辞」(1890)
訳: 本田雅也

ゲーアハルト・ハウプトマン「オットー・ブラムの葬儀に際しての弔辞
(1912年12月1日)」(1912)
訳: 本田雅也

ゲーアハルト・ハウプトマン「ノーベル賞の意義(1912年12月10日、
ストックホルムのノーベル賞晩餐会で行なわれた講演)」
訳: 本田雅也

オットー・ブラム「自然主義と演劇」(1891) 訳: 本田雅也

マックス・ラインハルト「ラインハルト、自らの芸術について語る
(1916年のインタビュー)」(1916) 訳: 坂巻隆裕

マックス・ラインハルト『「真夏の夜の夢」1905年上演の演出の手引き
から」(1905) 訳: 坂巻隆裕

フーゴ・フォン・ホフマンスタール「ラインハルトの仕事」(1928) 訳: 坂巻隆裕

ゲオルグ・ルカーチ『近代戯曲の発展史』(1911、抄訳) 訳: 谷川道子

英米

〔解説〕内野儀「英米の世紀末転換期から1930年代までの演劇と演劇論」

ウィリアム・アーチャー「ほんとうのイブセン」(1901) 訳: 内野儀

エドワード・ゴードン・クレイグ「俳優と超人形」(1907) 訳: 内野儀

ガートルード・スタイン「さまざまな劇」(1935) 訳: 小澤英実

フランス・ベルギー

〔解説〕藤井慎太郎「フランス語圏の演劇論」

モーリス・メーテルラン「閑話〜演劇について〜」(1890) 訳: 穴澤万里子

アドルフ・アッピア「ドラマと演出の将来」(1918-1919) 訳: 田中晴子

アドルフ・アッピア「リトミック体操と演劇」(1911) 訳: 田中晴子

アンドレ・アントワーヌ(編)「自由劇場」(1890) 訳: 横山義志

アンドレ・アントワーヌ「演出についてのおしゃべり」(1903) 訳: 横山義志

アンドレ・アントワーヌ「現代の俳優術」(1924) 訳: 横山義志

ジャック・コポー「ドラマの革新の試み」(1903) 訳: 田中晴子

モーリス・ポトウシェール「人民劇場」(1899) 訳: 田中晴子

民衆劇場創設委員会「公教育・美術大臣への手紙」(1889) 訳: 田中晴子

フィルマン・ジェミエ「明日の演劇とシェイクスピア協会」(1917) 訳: 田中晴子

ロシア

〔解説〕鴻英良「二十世紀ロシア芸術の囀」

レオニード・アンドレーエフ『野鴨』(1901) 訳: 塚原孝

ヴァレリー・ブリュソフ「不必要な真実
(モスクワ芸術座について)」(1902) 訳: 平松潤奈

ヴァチェスラフ・イワノフ「予感と予兆
新たな有機的時代と未来の演劇」(1906) 訳: 鴻英良

アレクサンドル・ブローケ「ヘンリック・イブセン」(1908) 訳: 岩崎理恵

アンドレイ・ペールイ「演劇と現代のドラマ」(1908) 訳: 八木君人

レオニード・サバネーエフ「音と色彩の相関関係について」(1911) 訳: 梅津紀雄

チャールズ・S.マイヤーズ「共感覚の2つの事例」(1914) 訳: 梅津紀雄

各国現代演劇論(ラテンアメリカ編)

〔解説〕里見実「中南米演劇 解説のためのノート」

メキシコ

ルイス・バルデス「エル・テアトロ・カンペシーノ——
その発端」(1966) 訳: 里見実

アニック・トゥルゲール「チカーノ演劇イスペインックの
伝統と「アクト」の革新」(1991) 訳: 里見実

ドナルド・H・フリッシュマン「現代マヤ演劇と民族紛争
——歴史の再発見と再解釈」(1995) 訳: 里見実

ペルー

ミゲル・ルビオ・サバタ「アンデスの人々との出会い」(1983) 訳: 里見実

ミゲル・ルビオ・サバタ「北京オペラ(京劇)について
のノートと考察」(1995) 訳: 里見実

コロンビア

エンリケ・フェナベントウーラ「コロンビアの新しい演劇」(1979) 訳: 里見実

エンリケ・フェナベントウーラ「文化と政治」(1987) 訳: 里見実

「エンリケ・フェナベントウーラとのインタビュー」(1981) 訳: 里見実

サンティアゴ・ガルシア「コロンビアにおける「新しい演劇」の運動と非
アリストテレス的演劇」(1983) 訳: 里見実

サンティアゴ・ガルシア「ケベードの壁掛けの向こうに見える世界」(1992)
訳: 里見実

サンティアゴ・ガルシア「現代演劇における記憶と神話」(2005)
訳: 里見実

ウルグアイ

アタワルパ・デル・シオッポ
「わが大陸の民衆が必要とする演劇を、集団創作は培う方途となるのか
もしれない」(1979) 訳: 里見実

ブラジル

アウグスト・ボアール「演劇を通して何かを言いたい俳優と
俳優のための200のエクササイズとゲーム」(1988) 訳: 里見実

アウグスト・ボアール「民衆演劇にはいろいろな形式のものがあるが、
私は、そのどれもが好きだ。」(1975) 訳: 里見実

各国現代演劇論(中国編)

〔解説〕平林宣和「演劇博物館連携研究拠点翻訳プロジェクト中国部門、
および傅謹氏の論文「東洋芸術のアイデンティティー梅蘭芳の1930年
訪米公演の文化的解釈」について」

焦菊隱「演出家・作家・作品」(1962) 訳: 瀬戸宏

〔解説〕瀬戸宏「解説・焦菊隱『演出家・作家・作品』」

傅謹「東洋芸術のアイデンティティー
——梅蘭芳訪米公演の文化的解釈」(2007) 訳: 平林宣和

傅謹「『百花齊放』と『推陳出新』——20世紀50年代における中国演
劇政策への新たな評価」(2002) 訳: 大野陽介

〔解説〕大野陽介「演劇の自律と自由な市場」

傅謹「『推陳出新』を論ず」(1998) 訳: 田村容子

〔解説〕田村容子「『推陳出新』を論ず」

傅謹「『講話』から“戯改”へ——20世紀中国演劇発展の歴史への一つの
視角」(2003) 訳: 藤野真子

〔解説〕藤野真子「『講話』から“戯改”へ——20世紀中国演劇発展の歴史
への一つの視角」

傅謹「中国『禁演』50年史略論」(1999) 訳: 松浦恒雄

〔解説〕松浦恒雄「新中国『禁演』五十年史略論」

※一部は2013年3月末公開開始予定。

傅謹「先生たちの改革」(2005) 訳:三須祐介

張頌甲「“歩を進め”ても“形を換えず”——梅蘭芳、旧劇改革を語る」(1949) 訳:三須祐介

(解題)三須祐介「知識人と役者のはざま」

胡適「イブセン主義」(1918) 訳:瀬戸宏

(解題)瀬戸宏「解説・胡適『イブセン主義』」

胡適「文学進化の観念と演劇改良」 訳:大江千晶

(解題)瀬戸宏「解説・胡適『文学進化の観念と演劇改良』」

胡適「梅蘭芳と中国演劇」(1930) 訳:平林宣和

各国現代演劇論(東南アジア編)

(解題)松井憲太郎「アジアの現代演劇とのコラボレーション」

C.J.W.-L. ウィー、リー・チーキン
「壁の向こう、その先のビジョンへ——クオ・パオクン、境界線を越えて」(2003) 訳:滝口健

ウジェヌ・ヴァン・エルヴァン「ピープル・パワーの舞台を築く——フィリピン教育演劇協会(PETA)」(1992) 訳:高山リサ

クリッシェン・ジット「近現代東南アジア演劇概論」(1999) 訳:吉田季実子

ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての(1938年問題)

(解題)谷川道子「舞台芸術文献の翻訳と公開:ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての(1938年問題)」

ドイツ

(解題)谷川道子「無名のヘラクレスたち:反ファシズム闘争の光と影——ベーター・ヴァイスの遺作『抵抗の美学』のために」

フリードリヒ・ヴォルフ「ファシズムのドラマトウルギー、反ファシズムのドラマトウルギー」(1934) 訳:本田雅也

エルンスト・トラウ「劇作家の作品について」(1934) 訳:本田雅也

フリードリヒ・ヴォルフ「ドイツ・ファシズムの劇文学」(1936) 訳:本田雅也

エルヴィーン・ピスカートア「過去の教訓と未来の課題について」(1934) 訳:萩原健

ベルンハルト・ライヒ「ドイツのアンチファシズムの劇作の方法論について」(1937) 訳:萩原健

(解題)萩原健「ソ連にいたドイツからの亡命者たち——トラウ、ヴォルフ、ピスカートア、ライヒ」

オスカー・シュレンマー「今日の芸術状況について」(1932) 訳:柴田隆子

オスカー・シュレンマー「ピスカートアとモダン・シアター」(1928) 訳:柴田隆子

オスカー・シュレンマー「素材からの造形」(1930) 訳:柴田隆子

クルト・ヨース「タンツテアターの言語」(1935) 訳:柴田隆子

(解題)柴田隆子「空間論・身体論・舞踊論の位相からみた『演劇』表象の転位——シュレンマー、ヨース」

第二回ドイツ舞踊家会議「舞踊形態=舞踊言語=舞踊記譜 アンケート」[抜粋](1928) 訳:古後奈緒子

ルドルフ・フォン・ラバン「芸術作品としてのコロス」(1928) 訳:古後奈緒子

ルドルフ・フォン・ラバン「舞踊のコンポジションと記譜舞踊」(1928) 訳:古後奈緒子

ルドルフ・フォン・ラバン「ドイツのタンツビューネ——前史と展望」(1936) 訳:古後奈緒子

ルドルフ・フォン・ラバン「祝祭における祭儀教育」(1920) 訳:古後奈緒子

マリー・ウィグマン「現代の舞踊作品」(1925) 訳:古後奈緒子

マリー・ウィグマン「新しい芸術舞踊の本質」(1936) 訳:古後奈緒子

(解題)古後奈緒子「抵抗と順応のドイツ・モダンダンス小史——ラバンとウィグマン」

ロシア

(解題)鴻英良「芸術家の抵抗とそのエチカ」

P.M.ケルジェンツェフ「無縁の劇場」(『プラウダ』紙、1937年12月17日) 訳:上田洋子

1937年12月22、23、25日の国立メイエルホリド劇場劇団員全体集会上における論文「無縁の劇場」に関する討議 訳:平松潤奈、上田洋子、鴻英良

クルト・ケルステン「マクシム・ゴリキー:勝利の予言者」(1936) 訳:柴田隆子

ベルンハルト・ツィーグラウ「マクシム・ゴリキーの遺産」(1937) 訳:柴田隆子

イタリア

(解題)太田岳人「ヨーロッパの舞台表象の変容・転移としての(1938年問題)(イタリア編)」

フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ「ヴァラエティ・ショー」(1913) 訳:太田岳人

フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ、エンリコ・セッティメリ、ブルーノ・コッラ「未来派の総合演劇(非技術的—力動的—同時的—自律的—非論理的—非現実的)」(1915) 訳:太田岳人

フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ、フランチェスコ・カンジュッロ「驚愕の演劇(総合的演劇、肉体狂気、舞台の自由語、ダイナミックで大意的な朗唱、演劇—新聞、演劇—絵画ギャラリー、楽器の即興的論議、その他)」(1921) 訳:太田岳人

フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ「総合演劇と驚愕の演劇の後、我々は純粋要素による抽象的反心理主義的演劇と、触覚演劇を考案するだろう」(1924) 訳:太田岳人

アントン・ジュリオ・ブラガリア「演劇についてのベニート・ムッソリーニへの手紙」(1929) 訳:太田岳人

エンリコ・ブランボリーニ「未来派の舞台環境」(1924) 訳:太田岳人

エンリコ・ブランボリーニ「印象主義ダンスから未来派ダンスへ」(1931) 訳:太田岳人

フランス

(解題)堀切克洋「トーキー以後、プレヒト以前——1930年代フランスの舞台芸術環境をめぐる」

ルイ・ジュヴェ「『肉体を離脱した俳優』序文」(1943) 訳:間瀬幸江

ルイ・ジュヴェ「ジャン＝ルイの記憶によせて」(1943) 訳:間瀬幸江

ジャン＝ルイ・バロー「Ch.グランヴァル」(1949) 訳:間瀬幸江

ジャン＝ルイ・バロー「『創え』」(1949) 訳:間瀬幸江

ジャン＝ルイ・バロー「アントナン・アルトー」(1949) 訳:堀切克洋

アントナン・アルトー「ルイ・ジュヴェへの手紙」 訳:堀切克洋

アントナン・アルトー「ジャン＝ルイ・バローへの手紙」(1935-36) 訳:堀切克洋

セルジュ・リファール「振付家の宣言」(1935) 訳:北原まり子

《翻訳プロジェクト》シンポジウム

「演劇研究基盤整備：舞台芸術文献の翻訳と公開」（通称：「翻訳プロジェクト」）では、これまで4年間にわたって、未邦訳の演劇論、論文、戯曲のうち重要な文献を翻訳し、ウェブ上で公開してきた。

初年度である2010年度には「ヨーロッパ世紀末転換期演劇論」というコーパスのなかで、英語・ロシア語・ドイツ語・フランス語の四言語を通じて、1920年代の「歴史的アバンギャルド」と呼ばれる芸術潮流の基礎をつくった19世紀末の自然主義・象徴主義の文献を反省的に見直し、400字詰原稿用紙に換算して700枚ほどの翻訳をウェブで公開した。

2011年度・2012年度には、「現代各国演劇論」というコーパスの下で、中国、ラテンアメリカ諸国、そして東南アジア諸国の1960年代以降の演劇論の翻訳を行った。これらの領域はいずれもヨーロッパと比較すると一般読者の関心が低く、また情報も少ないため、当該の研究成果は今後の研究のための重要な基盤となるだろう。

最終年度である2013年度には、1920年代の「歴史アヴァンギャルド」における理論や実践の数々が、1930年代という不況と戦争の時代において、いかなるかたちで権力に抵抗しつつ、雲散霧消していったのかという問題意識の下で、ロシア語、ドイツ語、フランス語、イタリア語における1930年代の演劇論・舞踊論の翻訳を行った。これらは2011年度から2012年度にかけて「1938年問題研究会」として行われた全6回の公開研究会の成果をベースとしている。ここでは、19世紀末から20世紀前半の演劇史をより大きなパースペクティブで概観するために政治学や歴史学の知見も動員し、現代演劇の分析にも応用可能なテキストの再検討と翻訳が目指された。

これら4年間の共同研究を振り返るとともに、今年度の中心的な研究課題である「1938年問題」について、総括討論を行うためのシンポジウムが2014年1月10日（金）、早稲田大学小野記念講堂を会場に開催された。以下は、その報告である。

前半は、鴻英良氏（演劇批評家）を司会に、里見実氏（國學院大学名誉教授）、松井憲太郎氏（キラリ☆ふじみ館長）、平林宣和氏（早稲田大学准教授）をパネリストに迎え、翻訳プロジェクトにおいて、ラテンアメリカ、東南アジア、中国の文献がどのような問題意識の下に翻訳されてきたのか、及び非西洋世界における近現代演劇がどのようなかたちで展開してきたのかについて、報告と質疑応答が行われた。まず平林氏が、漢学・支那学・中国学が行ってきたのは古典戯曲の翻訳であり、元雑劇などに関する翻訳の蓄積はあるものの、近代以降の重要な文献は、体系的には訳されていないこと、またそのことを十分に意識した上で、中国チームでは2種類の文献を翻訳すべく作業を進めてきたことを報告した。2種類の文献とは、20世紀の中国史上で影響力のあった文献と、中国の演劇研究者の今を伝える文献である。続いて松井氏は、東南アジアでは原語による戯曲や演劇書がほとんど出版されていない現状を確認、その上で、フィリピンの劇団Philippine Educational Theater Association（略称PETA＝ベタ）を例に、第二次世界大戦以降に近代国家として樹立されてきた国々において、演劇がどのような役割を果たしてきたのかを論じた。最後に里見氏は、演

劇が社会のなかに深く根づきながら息づいている、そういう時代があるとすれば、ラテンアメリカはまさにそのような特権的な時代をいま生きているとよいと述べ、現代ラテンアメリカ演劇がキューバ革命とともに始まったことを、さらにその後の展開について、アウグスト・ボアールやミゲル・ルビオ・サパタ、エンリケ・ブエナVENTOURA、ルイス・バルデスらに言及することで明らかにした。

後半は、1930年代——20年代の第一次演劇革命と60年代の第二次演劇革命＝ネオ・アヴァンギャルドの間——に、表象の深層の変容が起こったのではないかとの見通しの下、〈1938年〉を〈1968年〉と同じような象徴的年号と捉え、20年代から30年代への「舞台表象の問題系の転位と展開」として、問題の所在を浮かび上がらせようと企図した「1938年問題」について、秋葉裕一氏（早稲田大学教授）の司会のもと、鴻英良氏、谷川道子氏（東京外国語大学名誉教授）、塚原史氏（早稲田大学教授・會津八一記念博物館館長）の3人のパネリストが発言した。まず谷川氏が、1934～39年は政治と芸術が目に見えてせめぎあった時代であり、その象徴が〈1938年〉であったと問題を提起。スターリンによる反形式主義キャンペーン、社会主義リアリズムテーゼ化から大粛清への展開を左目に見て、ベルリン・オリンピックとその映画化へのレニ・リーフェンシュタールの起用とナチスの「退廃芸術展」に象徴されるヒトラーによる芸術の政治的利用を右目で見ながら、スペイン市民戦争とピカソの『ゲルニカ』、パリ万博と並行して、亡命ドイツ人の中で表現主義の評価をめぐる論争が展開し、反ファシズム国際作家会議が文化遺産擁護を掲げてパリで開催されるという時代状況のさなかで、政治と美学のせめぎ合いが、その左右両極のベクトルを最も顕わにした時代だったと結論した。続いて鴻氏は、反形式主義キャンペーンから大粛清の流れへの象徴的事件であった1937年12月22、23、25日のGOSTIM〔メイエルホリド名称国立劇場〕のメイエルホリド弾劾全体集会の位置づけを述べるとともに、メイエルホリドが自分の正当性を主張することによって、困難な状況に置かれた時の芸術家がどのように自分の芸術的・演劇的ポジションを論理的に構築していくのか、抵抗の方法は言語的にどのように展開しうることかを示した、と論じた。最後に塚原氏は、1938年のフランスについて、第二の「大戦前夜」であり、漠然とした不安と現状維持の楽観、その反転の時代であったと述べ、1937年5月～11月のパリ万博が象徴的にあらわすように、1937～1938年のフランスでは、政治、経済、演劇、文学（出版）の各分野において祝祭性がいまだ失われていなかったと結んだ。

会場からも、ドイツの空間論・身体論・舞踊論の位相からみた「演劇」表象の転位や、イタリアの未来派について、1930年代のフランスの舞台芸術環境をめぐっての非常に活発な議論が交わされた。

本研究課題は、演劇研究のための基盤整備事業として、翻訳のウェブ公開がひとつの有効な手段であることを対外的に示してきたが、今後は、有志の研究者による相互的な交流と協力体制の構築によって、より広範なかたちで問題意識の共有しつつ、プロジェクトの発展的継続の可能性を模索していく必要があるだろう。

（宮信明）



鴻英良氏、里見実氏



松井憲太郎氏、平林宣和氏



秋葉裕一氏、塚原史氏



鴻英良氏、谷川道子氏

テーマ研究は拠点が研究テーマを提案して学外諸機関と連携した共同研究を行い、そこに広く研究者の参集を呼びかけるものです。研究期間は2009年から5年間で、今年度は最終年度にあたります。研究チームは以下の9つで、今年度から新たにテーマ研究9「寺山修司の創作」が加わりました。

研究代表者・分担者の肩書きは、年度末の成果報告時のものであり、現在の所属とは異なることがあります。

テーマ研究

1

日本における中国古典演劇の受容と研究

研究代表者：岡崎由美（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：平林宣和（早稲田大学政治経済学学術院准教授）、川浩二（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、岩田和子（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、伴俊典（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、黄仕忠（中国中山大学中国古文献研究所教授）、傅謹（中国戯曲学院教授）

【研究目的】

江戸期～明治・大正期に至るまでの間、日本に舶載された中国古典演劇資料および日本人によって作成された中国古典演劇の翻訳、注釈、評論、研究を対象として、日本が中国伝統演劇をいかに受容し、日中間の演劇を通じた文化・学術交流を形成したか、ということを明らかにする。

【研究成果の概要】

平成25(2013)年度

『水滸記』読書会の成果を踏まえ、「早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵『水滸記』鈔本の翻刻と研究」を刊行した。これは、本テーマ研究で新たに発見された早稲田大学演劇博物館所蔵の『水滸記』日中対訳写本の影印、翻刻に研究論考を付したものである。本写本の書写自体は幕末から明治期にかけてと見られるが、これに先行して、山口大学所蔵の『水滸記』摘訳稿本（徳山藩毛利氏棲息堂旧蔵書）、関西大学長澤文庫千葉掬香旧蔵汲古閣刊本『水滸記』上標訓訳本（江戸末期の書肆達磨屋五一の印記あり）が存在し、かつこの3本は、個々に独立して翻訳されたものではなく、山口大学本→関西大学本→演劇博物館本と訳文の整理推敲を重ねてできあがったものである。また『水滸記』の翻訳は、現存する江戸期の中国古典演劇翻訳の中では唯一の全訳である。しかも演劇博物館本は、ほかの2本と併せて翻訳作業の推敲プロセスを見てとれる希少な資料である。

山口大学本は、前半部分の曲辞が抄録の状態、かつ中国演劇に関する基本知識や語釈の書入れが、他の2本よりも1桁多い300余件に達しており、まず翻訳者が原文を理解するために書写した翻訳初期の段階であることは明らかである。また翻訳にあたって、曲辞よりセリフを先行して開始したことがわかる。関西大学本と演劇博物館本は山口本に基づいて訳語の取捨選択を行い、首尾一貫して読ませる日本語訳文を形成している。

関西大学本と演劇博物館本は体裁が一致し、中国語原文に句点、訓点、送り仮名、ルビ等を施し、傍点やカギカッコ、圏点などの記号を駆使して、曲辞中の襯字やセリフの弁別を行っており、原文読解の詳細な作業を示している。原文左側に付された日本語傍訳は、演劇用語については「花道」「若女形」「半道悪」など歌舞伎の概念を援用しているが、訳文の文体風格は歌舞伎や謡曲ではなく、むしろ説経節や浄瑠璃など語りもののそれである。原文の曲辞（韻文）と賓白（散文）の混在する中国古典演劇の形式は、フシと詞から成る語り物の形式の方が翻訳の際になじんだようである。

【研究成果の総括】

日本人による中国古典演劇の受容について、比較文学や物語伝播論の観点から、戯曲故事（物語内容）の文学的影響関係を論じたものはこれまでもあるが、本テーマ研究が目指したのは、歌

劇という舞台芸術の形態も含め、日本人がいかに中国古典演劇という異文化の文芸事象を理解し、受け入れたか、という課題を、中国から日本への一方的な伝播・影響の考察ではなく東アジアにおける中国演劇文化の共有の歴史という視点で考察しようとしたものである。この足跡を辿るにあたって、本テーマ研究では、①江戸期～明治期における中国古典演劇の受容、②大正～昭和期における京劇の受容、の2つの研究班を組織した。①は、いわば近世漢学による中国理解から近代的学問としての演劇研究に至る過程での受容史であり、②は中国での観劇や中国劇団の来日公演など、日本人が実際に同時代の中国伝統演劇を見聞することによって形成されていく受容史である。

①の研究班では、まず江戸期における中国古典演劇の翻訳を対象とした。これは研究自体が余りなされていない分野であるが、中国演劇の理解と日本語による表出という2つの文化のインプットとアウトプットの両面を持ち、受容作業の過程が克明に見てとれるからである。ここで大きな収穫があったのは、演劇博物館所蔵の『水滸記』の発見である。『水滸記』の全訳はすでに長澤規矩也氏によって汲古閣刊本『水滸記』上標訓訳本（現関西大学所蔵）の存在が指摘されていたが、これに本テーマ研究の研究分担者黄仕忠教授が山口大学で見出した摘訳稿本を加えて3種テキストを字句に至るまで対照すると、3種は個々に独立して翻訳されたものではなく、山口大学本→関西大学本→演劇博物館本と訳文の整理推敲を重ねてできあがったものであることがわかった。即ち、現存する江戸期唯一の中国古典演劇全訳という資料価値のみならず、中国古典演劇への理解の過程、推敲の手順など、中国古典演劇に対する翻訳受容の工程そのものを提示する貴重な資料であるといえる。もう一つの発見は、演劇博物館幸田露伴旧蔵の『元人雜劇百種』の加訓摘訳本である。明治期においては、近代的学問としての「文学史」研究の隆盛の中で、森槐南、笹川臨風、千葉掬香など近代漢学者の漢籍収蔵とその中国古典演劇研究について焦点を当て、来日した中国戯曲史研究の開拓者王国維と近代日本の中国文学研究者との相互の触発から、学術的面で中国古典演劇研究の共有の様相を考察した。②の研究班では、明治期以降の日本における京劇の受容について、調査研究及び中国の研究者との学術交流を行った。調査研究に関しては、分担者および協力者によって、梅蘭芳の来日公演、1920年代に組織された支那劇研究会、植民地時代の台湾における日本人社会と中国演劇の接触などについて、詳細な考証が実施された。また本テーマ研究では、中山大学中国古文献研究所、同中国非物質文化遺産研究中心、中国戯曲学院、中国芸術研究院などの研究者と積極的に連携を図り、研究分担者である黄仕忠、傅謹両氏をはじめ、鄒元江、李莉薇、呉開英等、関連領域に業績のある中国人研究者に講義や研究報告を依頼して、最新の研究成果の共有を図り、日中間の学術交流を促進した。

台本による歌舞伎作品復元の調査・研究

研究代表者：古井戸秀夫（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

研究分担者：児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授）、今岡謙太郎（武蔵野美術大学教授）、鈴木英一（聖学院大学非常勤講師）、安富順（明治大学非常勤講師）、ローレンス・コミンズ（ポートランド州立大学教授）

【研究目的】

「台本による歌舞伎作品復元の研究」における研究目的は、演劇博物館の所蔵する歌舞伎台本をデータ化して公開することにより、埋もれている歌舞伎の文化資源を発掘、調査、復元するための基礎を構築することにある。研究は、①演劇博物館所蔵歌舞伎台本のデータ化と、②個別研究1-6からなる。

個別研究1「鶴屋南北の台本研究」（担当：古井戸）

個別研究2「歌舞伎舞踊台本研究」（担当：鈴木）

個別研究3「黙阿弥の台本研究」（担当：今岡）

個別研究4「義太夫狂言の台本研究」（担当：児玉）

個別研究5「大坂歌舞伎の台本研究」（担当：安富）

個別研究6「初代市川團十郎の歌舞伎復活の研究」（担当：コミンズ）

【研究成果の概要】

平成25（2013）年度

研究目的①「演劇博物館所蔵歌舞伎台本のデータ化の研究」の研究成果は、以下の通りである。「A 虫食い破損部分の修復研究」では、修復の専門家と歌舞伎台本の研究家の共同研究を進めた。虫食いの台本が修復により、文化資源として新しい価値を獲得するかが、新たな研究課題となった。「B データ化の研究」では、昨年度データ化した、狂言作者の自筆の書き下ろし台本を多く含む「ロ16」の内容の分析に入った。また、「河竹文庫」のデジタル化について、演劇側の作業の進捗状況を確認し、今後の課題について検討を進めた。また、台本周辺資料の整備として、雑誌『演芸画報』昭和期のデータ化を完了した。これによって、大正・昭和期の新作歌舞伎で、戯曲掲載されたものの利用分析の便が飛躍的に向上すると思われる。

研究目的②の個別研究の研究成果は、以下の通りである。

個別研究①「鶴屋南北の台本研究」では、鶴屋南北の評伝研究を進めた。

個別研究②「歌舞伎舞踊の台本研究」では、国立劇場文芸課と協力して上演台本作成の検討を進め、「春陽三獅子（いまようみつのししがしら）」の台本を作成した。山村友五郎関係の上演台本に関する研究を進めた。

個別研究③「黙阿弥の台本研究」では、『隅田川対加賀紋』（国立劇場・未翻刻戯曲集20）、『隅田川対加賀紋』『裏表忠臣蔵』（国立劇場・正本写合巻集12・13）の編集・刊行を指導した。

個別研究④「義太夫狂言の台本研究」では、国立劇場文芸課と協力して、復活上演準備台本についての検討を行った。また、歌舞伎での復活上演のための台本に協力した関係で、文案での復活上演に関する相談に与った。

個別研究⑤「大坂歌舞伎の台本研究」では、池田文庫所蔵の歌舞伎台本の調査を行った。

【研究成果の総括】

歌舞伎上演における作品の復活には、能や文楽とは異なる条件が存在する。1500人をこえるキャパシティの劇場を25日間開けることによって例月の興行を成り立たせている歌舞伎は、登場人物の多さ、関連する人件費の巨大さ、周辺費用の莫大さにおいて、能や文楽の比ではなく、興行的現実を離れた実験を受け入れる土壌に乏しい。かつては時折見られた、手弁当・持ち出しによる実験的公演もほとんどなくなり、歌舞伎興行の好況は、いかなる企画も財政的にペイできる線にまでもっていけない、という発想につながり、好況な時こそ実験をという方向にもつながってはいないのが現実である。松竹による興行でも復活上演は試みられているが、まず現代の観客に向けてのエンターテインメントとして成立させることを第一義と考えられているのは、営利会社である以上、無理からぬところである。注目すべき、もしくは憂慮すべきは、国立劇場においてもエンターテインメント性を最優先した復活（と称する）上演が度重ねられていることで、昭和末までに一般的と考えられてきたような、アカデミズムと現場とが連携・協力した形での復活上演は、国立劇場における復活のなかでの少数派に限られてきているのが現状である。

こうした状況下では、アカデミズムと現場が連携の可能性を模索するのはきわめて難しいといわざるをえないが、本研究に集結した研究メンバーは、現在数少ない、そうした現場との連携による成果を有している。研究年度の間に、国立劇場の復活上演に備えたストックとしての台本と、実際の上演に際しての台本作成に実際に携わった。「誦競艶仲町」「菅原草紙」「奴胤廓春風」「大塔宮曦鑑」「春陽三獅子」などであるが、現在そのような事例を有する研究者は他にはない。この点において、本研究が、アカデミズムと現場の関係について分析・検討する最前線でありえたことは疑いがない。

研究面では、歌舞伎番付と、代表的な演劇雑誌『演芸画報』のデジタル化を進め、いながらにして一次資料に接しうる環境を整えた。この成果は、むしろ今後現れてくるものと思われるが、研究年度期間中にも、大いに活用された。これらの成果を踏まえて、演劇博物館所蔵の歌舞伎台本、演劇雑誌をどのように情報公開してゆか、が大きな課題として残されていると考える。演劇博物館自体の姿勢・方針とも関わることであるが、世界最大の役者絵の情報公開に続くような案件と位置づけることが可能であろうと思われる。上演情報や台本の収蔵状況のデータベース化も、今後に益するところが大きいものと考えている。

テーマ研究 3

舞台芸術 創造とその環境 日本／世界

研究代表者：藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：奥香織（早稲田大学理工学術院非常勤講師）、秋野有紀（獨協大学専任講師）

【研究目的】

本研究は、舞台芸術における創造と環境の関係を可能な限り、地理的・時代的・方法的に多面的に分析しようとするものである。創造行為に従事する芸術家の視点を重視するが、同時に、その芸術家の行為を陰に陽に規定している公的な制度の視点も合わせて考え、日本そして世界における舞台芸術の現在をとらえ直すことを目的とする。

【研究成果の概要】

平成25（2013）年度

- ・オーラル・ヒストリー 2013年度は、年末までに計4回の定例研究会を開催し、オーラル・ヒストリーの方法について議論するとともに、バレエ・ダンサーとして活躍した後、教育に従事した木村公香のインタビュー実施、テープ起こし原稿の校閲（聞き手・校閲：斎藤慶子、深澤南土実）を行った。年度末までに佐藤信（演出家）、橋本洋（舞台監督）のインタビューを実施し、原稿化することを予定している。
- ・ローラン・シェトゥアーヌによるレクチャー フランス出身だがもっぱらドイツでドイツ語戯曲の演出によって、近年はダンス作品の振付によって知られている振付家・演出家で、神奈川芸術劇場に作品『M!M』が招聘されたローラン・シェトゥアーヌを招き、藤井慎太郎が聞き手となって、同作品の創作の方法論と背景、ドイツ語圏で活動することの意味について伺った。
- ・ジャン＝マルク・アドルフによるレクチャー フランスにおける舞踊批評の第一人者で、雑誌『ムーヴマン』を創刊し、現在も編集主幹を務めるジャン＝マルク・アドルフを招き、フランスの現代ダンス、とりわけマギー・マランの仕事に関する公開レクチャーを開催した。
- ・F/Tユニバーシティ 今年度はレクチャーは開催せずに、単行本『ポストドラマ時代の創造力 新しい演劇をつくるための12のレッスン』（2014年1月に白水社より刊行予定）としてこれまでの成果をとりまとめるため、原稿の校閲作業を中心に活動した。

【研究成果の総括】

テーマ研究「舞台芸術 創造とその環境 日本／世界」では、舞台芸術の実践における創造と環境の多面的な関係を分析しようとしてきた。その中でも、創造行為に従事する芸術家の視点を重視し、世界的に著名なアーティスト、研究者、批評家を数多く招いてきて、外部の劇場、フェスティバル、国際組織と連携して、公開レクチャーを開催してきた。そこでは、外部の劇場やフェスティバルで当該アーティストによる公演が並行して実施されることによって、より深いかたちでの知の共有化、議論の活性化、ひいては国際／国内的交流の促進につながったものとする。その中の成果の一部、特にフェスティバル／トーキョーとの連携の下、F/Tユニバーシティとして実施されたレクチャー・シリーズについては、単行本『ポストドラマ時代の創造力 新しい演劇をつくるための12のレッスン』（白水社、2014年1月）として成果を公開する予定である。リミニ・プロトコル、ロメオ・カステルッチ、ジェローム・ベル、ラビア・ムルエ、アラン・プラテル、ローラン・シェトゥアーヌらをこうして大学に招くことができた。これらのアーティストの証言は、芸術的創造とその環境の関係を考える上での第一の資料となる。またハンス＝ティース・レーマン、ジョゼット・フェラル、ジャン＝マルク・アドルフらの世界的に著名な研究者、批評家を招聘して、公開レクチャーを開催し、知を一般に還元し、研究の国際ネットワークを築くことができたことも、大きな成果であったと言えるだろう。

さらに、本テーマ研究は、その芸術家の行為を陰に陽に規定している「制度」や「環境」の視点も合わせて考えようとした。アーティスト、研究者、批評家によるレクチャーにおいても、その視点は重視してきた。だが、中でも過去3か年にわたって取り組んできたオーラル・ヒストリー・アーカイヴ・プロジェクトは、日本の舞台芸術界に多大な貢献をした人物に対して、幼少期から現在に至るまでのライフ・ヒストリーについて聞き取り調査を行い、それを活字原稿にまとめたものだが、その証言は、たとえば1950年代、60年代、70年代の日本の舞台芸術創造環境に関する雄弁かつ貴重な証言となっている。

演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用

研究代表者：入江良郎（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）

研究分担者：児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授）、上田学（日本学術振興会・特別研究員PD）、碓井みちこ（関東学院大学文学部准教授）、金子健（文化庁文化財部伝統文化課）、榎木章（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、岡田秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、板倉史明（神戸大学大学院国際文化学研究所准教授）、松浦友生（成城大学大学院文学研究科博士課程）

【研究目的】

演劇博物館が所蔵する全映画フィルムを対象に、作品情報と所蔵情報の両面にわたる基礎調査を行い、将来のコレクションの管理、運用の手がかりとなるデータの整備を行う。また、とくに重要と思われるコレクションについてはより綿密な研究調査を行い、緊急の復元が必要と判断されるフィルムについては上映プリントやデジタル・メディアの作成を行うとともに、それらの成果を公表する。

【研究成果の概要】

平成 25 (2013) 年度

- ・ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」を記念して、11月2日～3日の2日間、早稲田大学演劇博物館と東京国立近代美術館フィルムセンターが共同で開催した「伝説の映画コレクション 早稲田大学演劇博物館所蔵フィルム特別上映会」（於フィルムセンター大ホール）で、演劇博物館が所蔵する明治大正期の日本映画、ドイツ無声映画、戦中に日本映画社ジャカルタ製作所が製作した宣伝映画、計11本が上映された。これらは外国映画も含め演劇博物館にのみ現存する希少なフィルムであり、新聞やテレビでも取り上げられて大きな反響を呼んだ。なお、上映作品のうち9本は当チームがニュー・プリントを作成、また4本は日本語字幕の作成を行った作品である。各作品の上映前には当チームの分担者が解説を行った。
- ・また、特別上映会会期中の11月2日には、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点と東京国立近代美術館フィルムセンターが共同で、研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」を開催し、分担者が当チームの成果報告とともに、演劇博物館の映画収集の軌跡や8mmフィルムも含めた主要なコレクションについて講演を行った。
- ・上記の公開イベントに加え、フィルムの調査については下記を実施した。

35mmフィルムについては、ドイツ映画2本、日本映画1本のデジタル・メディア作成を行うとともに、ドイツ映画2本については日本語字幕を作成した。また、可燃性フィルム36本の作品情報の採集を終える予定。可燃性フィルムは玩具映画が多数を占めているため、大阪芸術大学「玩具映画プロジェクト」が所蔵するコレクションとの比較も行った。

8mmフィルムについては、中村歌右衛門旧蔵品70点、森繁久彌旧蔵品23点、本田安次旧蔵品12点で作品情報の採集を終える予定。また、16mmフィルムについても森繁久彌旧蔵品23点、本田安次旧蔵品3点で作品情報の採集を終える予定。

9.5mmフィルムについては1本の調査と状態確認を行った。

- ・論文集ならびに所蔵映画目録の刊行を行う予定。

【研究成果の総括】

早稲田大学演劇博物館が所蔵する全映画フィルム、計908本を対象に所蔵情報と作品情報の採集を行うとともに、とくに重要なコレクションについては、より綿密な調査研究を行い、公開・閲覧用の上映プリントやデジタル・メディアの作成を行った。また成果報告の一環として、研究講演会を開催するとともに、所蔵フィルム目録と論文集を刊行した。

フィルム調査の詳細は下記の通り。なお、コレクションの数量については、調査の結果を踏まえて適宜修正を行った。

■ 8mmフィルム

専門の技術者が計271本の所蔵調査を行った。未撮影のフィルムなどを除く249本を対象にデジタル・メディアを作成したうえで、各分野の研究者が内容を調査し、作品情報の採集を行った。

■ 9.5mmフィルム

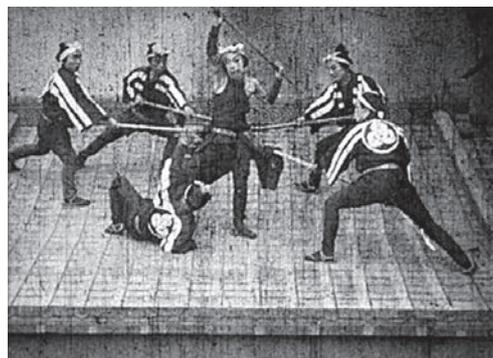
専門の技術者が計5本の所蔵調査を行った。メディア変換が行われていなかった4本についてはデジタル・メディアを作成したうえで、全コレクションの作品情報を採集した。

■ 16mmフィルム

専門の技術者が計564本の所蔵調査を行った。また、これと並行してコマ抜き情報（フィルム状の文字情報）を採集しながら作品情報の調査を行った。とくに重要と思われる49本についてはデジタル・メディアを作成し、また7本については35mmニュー・プリントを作成した。

■ 35mmフィルム

専門の技術者が計68本の所蔵調査を行った。また、これと並行してコマ抜き情報（フィルム状の文字情報）を採集しながら作品情報の調査を行った。可燃性フィルム46本についてはデジタル・メディアを作成し、また3本については35mmニュー・プリントを作成した。なお、可燃性フィルムの数量については、調査の結果を踏まえ適宜修正を行った。



「雷門大火 血染の纏」（1916）

テーマ研究
5

日本映画、その史的社会的研究

研究代表者：古賀太（日本大学芸術学部教授）

研究分担者：田島良一（日本大学芸術学部教授）、岩本憲児（日本大学芸術学部非常勤講師）、志村三代子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、中山信子（早稲田大学演劇博物館）、アンニ（明治学院大学言語文化研究所研究員）、蔡宜静（台湾康寧大学助理教授）、土田環（日本映画大学准教授）、渡邊大輔（日本大学芸術学部非常勤講師）、藤田純一（日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程）

【研究目的】

本研究では日本映画がどのように上映され、受け入れられていったかを研究することを目的としている。2011年度からは海外における日本映画の評価の歴史を研究しており、今年度は1960年代以降現在までに焦点を絞って、メンバーのみならず内外の研究者と共に調査することを目的としている。

【研究成果の概要】

平成25（2013）年度

2013年7月の研究会では、日本映画を海外に紹介した映画評論家のドナルド・リチーを招聘して、1960年度以降の日本映画の海外への普及について話を聞く予定であったが、2月19日に逝去したため、急遽彼の功績を巡るシンポジウムを開催することとした。

日本でリチーに関する映像を撮影中の森晃一の映像に始まって、ハンガリーの研究者、マートライ・ティタニアによるリチーの黒澤明論の分析、イエール大学のアーロン・ジェロー教授によるリチー著『The Japanese Cinema』（1959）の再検討、ニューヨークのジャパン・ソサエティで元プログラマーの平野共余子によるリチーとの共同作業の報告が発表された。そこから浮かび上がってきたのは、ドナルド・リチーの『The Japanese Cinema』が、米国のみならず世界各国に影響を与えたこと、その後のリチーの影響力は現在に至るまで衰えなかったことである。さらにリチーの文章は、日本映画を日本文化の枠に押し込め、エキゾチズムを前提として日本映画を評価する見方を形成したこともわかってきた。

2013年11月の研究会では、1960年以降の各国におけるドイツ、香港、フランス、イタリアから専門家を招聘した。ドイツの足立ラーベ加代は、数名の映画評論家や映画史家及びベルリン国際映画祭が日本映画を普及させるのに大きな役割を果たしたことを述べ、香港の邱淑嬌は、日本映画との関係が戦前から強く、戦後も合作等を通じてその関係が続いたことを分析した。フランスのファブリス・アルデュイニは、シネマテーク・フランセーズの館長だったアンリ・ラングロアを始めとする4人の存在が日本映画を普及するうえで大きかったことを解説し、イタリアのダリオ・トマージはウディネの極東映画祭、トリノ映画祭、トリノ映画博物館の3つの組織の活動を通じて北イタリアにおける日本映画の浸透について語った。

今年度の研究においてわかったのは、日本映画の普及においては国際映画祭やシネマテークの上映と、映画興行の両輪が必要であり、同時に映画評論家や研究者の活躍が大きな役割を果たすことである。

【研究成果の総括】

2009年度から始まった研究会は、2011年度半ばまでの前期と2011年度後半から2013年度までの後期に分けられる。2012年

度までの研究代表の岩本憲児と2013年度の研究代表の古賀太及び日本大学芸術学部の田島良一以外は、各期で研究メンバーを入れ替えた。

前期は碓井みちこ（関東学院大学文学部専任講師）、大久保遼（東京大学大学院学際情報学府博士後期課程）、小林貞弘（椋山女学園大学・中部大学非常勤講師）、本地晴彦（映画史研究家）、松本夏樹（大阪芸術大学非常勤講師）などがメンバーに加わった。

後期は志村三代子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、中山信子（早稲田大学演劇博物館）、アンニ（明治学院大学言語文化研究所研究員）、蔡宜静（台湾康寧大学助理教授）、土田環（日本映画大学准教授）、渡邊大輔（日本大学芸術学部非常勤講師）、藤田純一（日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程）などがメンバーになった。

前期においては、主として通説として流布されている日本映画誕生期に焦点を絞り、その上映形態、弁士、海外との交流史などを当時の資料を詳細に調べ、再検討した。あるいは映画初期において重要な役割を果たした梅屋庄吉や牧野省三、駒田好洋、小林喜三郎などのパイオニアの足跡を辿り、現代的な視点から再検討した。さらに個人に普及した家庭用映像機器や蓄音機と映画の関係性を調査したり、児童観客の誕生の過程を社会的な視点から調査した。

それらの成果は、2011年10月に森話社刊『日本映画史叢書』15巻として『日本映画の誕生』という題名のもとに論文集を刊行した。

後期は海外における日本映画の評価の歴史を3つの時代に分けて研究し、海外からのゲスト発表者を毎年招聘した。まず2011年度は戦前について研究し、「戦前日本の対外工作と宣伝」「文化交流か映画戦か」「戦前戦時下における日本映画のグローバル化」というテーマのもとに、国内および台湾、中国、韓国の研究者を招いて討議した。

2012年度は、戦後から1951年のベネチア国際映画祭における『羅生門』のグランプリ受賞の前後までを研究した。「漫画映画・合作映画・色彩映画」「『羅生門』以前以後」「戦後日本映画の海外進出を巡って」というテーマで、台湾、中国、フランス、アメリカと日本との関係について検討した。

2013年度は「ドナルド・リチー再考」「海外における日本映画の受容と影響：1960年代から現代まで」というテーマで、米国、ドイツ、フランス、イタリア、香港から研究者を招いて検討した。

後期の研究から浮かび上がったのは、国策としての自国映画の海外普及と海外の国際映画祭の関係、国際合作をめぐる諸問題、映画祭とフィルムライブラリーを中心とする公的上映施設と映画興行の関係、映画評論家や研究者の果たす役割などである。

今後日本映画がさらに海外に出てゆくためには、これまでの上映や評価の歴史に学ぶことが重要であり、公的支援、映画祭、フィルムライブラリー、映画評論家や研究者との連携が不可欠である。

演劇研究基盤整備：舞台芸術文献の翻訳と公開

研究代表者：秋葉裕一（早稲田大学理工学術院教授）

研究分担者：藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）、平林宣和（早稲田大学政治経済学術院准教授）、宮信明（早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点研究助手）

【研究目的】

本研究課題は、日本国外で刊行された未邦訳の舞台芸術関連文献を翻訳し、ウェブ上で無償公開することを目的とするものである。従来、専門外の読者がアクセスすることが困難であったテキストの翻訳を公開することによって、学生や一般読者も含めた多くの人々が、舞台芸術における教養的な理解を共有することが期待される。また、読者からの声を研究組織内に反映することによって、現代演劇に関する互恵的な議論を生み出すことも目指される。さらに、「ヨーロッパ地域における〈1938年問題〉」（1938年前後に起こった社会的・政治的・文化的変動を領域横断的な眼差しで捉え直す試み）や「各国現代演劇論（東南アジア編、中国編、ラテンアメリカ編）」など、独自のテーマ設定によって、これまでに十分な議論がなされてこなかった領域の知識を共有し、演劇研究全体に啓発を図ることを目的とする。

【研究成果の概要】

平成25（2013）年度

平成25（2013）年度は、1920年代の「歴史アヴァンギャルド」における理論や実践の数々が、1930年代という不況と戦争の時代において、いかなるかたちで権力に抵抗しつつ、雲散霧消していったのかという問題意識の下で、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、フランス語における1930年代の演劇論・舞踊論の翻訳を行った。これらは2011年度から2012年度にかけて「1938年問題研究会」として行われた全6回の公開研究会の成果をベースとしている。ここでは、19世紀末から20世紀前半の演劇史をより大きなパースペクティブで概観するために政治学や歴史学の知見も動員し、現代演劇の分析にも応用可能なテキストの再検討と翻訳が目指された。

平成25（2013）年度の具体的な成果物としては、ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938年問題〉（ドイツ・ロシア・イタリア・フランス）とともに、中国・ラテンアメリカの現代演劇に関する文献の翻訳・解題、あわせて48件の公開が挙げられる（プロジェクト特設サイトにおいて無償公開予定）。2013年末を原稿の締切として、2014年1月より編集・校正を開始、2014年2月下旬～3月上旬にアップロードを開始する。翻訳・解題の詳細については、4P～5Pの「翻訳プロジェクト」公開原稿一覧を参照され

たい。

なお、翻訳文献の選定については初年度の方法を踏襲し、言語別に設けられた翻訳代表者（谷川、藤井、鴻、里見、平林）が主導的に対象文献を探查し、若手研究者を含む翻訳分担者の斡旋をおこなった。また、課題全体の方針については、必要に応じて各代表者に参集を呼びかけ、全員の承認を経て決定した。

【研究成果の総括】

本研究課題は、国内の演劇研究の基盤整備として、主として未邦訳の重要な演劇・舞踊に関する文献の翻訳のウェブ公開を、特設ホームページ上において無償で公開することを目的とするものである。翻訳対象となる資料の選定にあたっては、早稲田大学内外の有識者（谷川道子氏、鴻英良氏、内野儀氏、藤井慎太郎氏、里見実氏、平林宣和氏、松井憲太郎氏等）をアドバイザーとして招き、演劇博物館の人的ネットワークを活用して、若手を中心とする研究者に翻訳の任にあたってもらった。全年度で研究分担者・協力者として翻訳に参加いただいた研究者の数は30名にも及ぶ。

とりわけ重要なポイントとして、資料選定にあたっては複数回にわたる研究会を重ねることで問題意識を共有して、演劇研究のために翻訳の必要性を特定することが目指された。また、これらの研究会は必ずしも言語によって隔てられてはおらず、さまざまな言語を主たる研究手段としている研究者や批評家たちがむしろ積極的に交流し、相互に意見を交わすことによって、従来の大学機関における言語別の研究の蓄積とは一線を画するものとなった。こうしたプロジェクトの特長については、2010年12月に早稲田大学で開催された日本演劇学会（秋の研究集会）における企画シンポジウムのなかで報告され、さまざまな有益な意見が交わされた。

全年度の研究成果は、著作権の許諾が得られない場合などを除いて、原則として特設ホームページ上にPDFファイル形式で公開している。翻訳が必要なテキストはまだ無数に残っているが、上記のような「基盤整備」をさらに進めるためには、有志の研究者による相互的な交流と協力体制の構築によって、プロジェクトの発展的継続の可能性を模索していく必要があるだろう。そうした言語横断的な研究体制のひとつのモデルを作ったという意味で、本研究課題は一定の成果を得られたものと見なさうだろう。

テーマ研究

7

能、昆劇の比較研究—日中伝統演劇の現在と未来

研究代表者：佐藤信（座・高円寺芸術監督、劇作家、演出家）

研究分担者：内野儀（東京大学総合文化研究科教授）、ダニー・ユン（香港現代文化研究所代表）、中尾薫（大阪大学大学院文学研究科専任講師）、楊慧儀（香港浸会大学翻訳過程副教授）、川口智子（座・高円寺企画、制作）

【研究目的】

平成13（2001）年に共にユネスコ世界無形文化遺産の指定を受けた日中の伝統演劇、能と昆劇は、それぞれが依拠する「謡曲」「昆曲」との関係性など、演劇的な共通部分が少なくない。本研究は、世界の共通遺産としてその価値が認定された能・昆劇について、従来必ずしも着目されてこなかった継承者の育成、芸芸、演目の継承、発展を対象にした公的な支援、および新しい創造への探求についての比較研究を目的としている。具体的には、日中の研究者、能・昆劇の実演家、さまざまな立場の現代芸術の関係者（演出家、批評家、支援組織スタッフなど）が協働して研究会・ワークショップを行うことで、①無形文化遺産指定後10年間の能・昆劇の動態研究、②古典演劇継承のための共通課題の整理、③現代演劇との交流による未来への可能性の検証、④実演家相互の技術交流と技術訓練方法の記録、データベース化などを目標としている。

【研究成果の概要】

平成25（2013）年度

研究最終年度の活動として、2014年2月に過去2年間の活動をまとめた記録論文集を編纂し、あわせて今年度の研究主任を中心とした成果発表会を、2014年2月3日（月）に早稲田大学26号館地下多目的講義室を会場として開催した。第1部では、楊慧儀（香港浸会大学副教授）、中尾薫（大阪大学専任講師）が、共同研究発表を行い、第2部のパネル・ディスカッションでは、研究代表者の佐藤信（劇作家・演出家、座・高円寺芸術監督）を司会に、竹本幹夫（早稲田大学教授）、清水寛二（能楽師、鏡仙会）、西村高夫（能楽師、鏡仙会）、楊慧儀（ジェシカ・ヤン）、中尾薫による活発な議論が交わされた。

加えて、継続的な活動の一環として、2013年12月江蘇省演芸集団昆劇院（中国・南京）において、「能」「昆劇」「現代演劇」の実演家によるワークショップ交流、および小作品創作と上演を行うとともに、研究代表者、研究分担者、ならびにゲストスピーカーを招いて両国の「能」と「昆劇」の継承・保存・発展に係わるシンポジウムを開催した。

なお、創作された小作品は、2014年1月に上海で上演する。

【研究成果の総括】

2011年度は研究初年度にあたるということもあり、本研究がどのような研究フレームをもって活動を進めていくかということが大きな焦点となった。この論議に入る前に、それぞれの伝統芸能についての理解を深める方法として、「能」「昆劇」の研究者による基調講演を行い、双方の実演家・研究者そして現代演劇の関係

者とともに知識の共有を行った。これにより「能」「昆劇」がそれぞれにかかえる問題を整理し、保存・発展につながる具体的な研究フレームの提案を行った。

また、6月（香港・南京・東京）、11月（香港）でのフォーラム開催と同時に能・昆劇・現代演劇の実演家の相互交流ワークショップが行ったほか、郭宝崑『靈戯』を題材として能と昆劇の実演家が協働作業を行う創作試演を行った。公開ワークショップには実演家に加え、研究者がオブザーバーとして参加し、技術訓練方法の記録・データベース化にむけての始点となった。

2012年度は、初年度に行った研究会・ワークショップの成果をふまえ、中尾薫、楊慧儀を中心とする研究活動が進められ、その成果として本年10月にシンポジウム「能の体、昆劇の体」を開催した。シンポジウムの中では、能と昆劇それぞれの実演家〔能：鶴沢久（観世龍）、昆劇：徐思佳、楊陽（江蘇省演芸集団昆劇院）〕によるデモンストレーションを行い、研究者が演技法と具体的に接することにより、相互の関連性と相違を考察する基礎的な視点を得ることから始まり、それぞれの伝統演劇が持つ空間性と、その中における身体の様式性を考察した。

さらに、中尾薫、楊慧儀の両研究者より研究の成果が報告された。この研究は、能と昆劇の動態調査、およびそれぞれの技術についての考察に基づく形で進められており、特に動作がもたらす美感、物語るといふ演劇的側面、意味を象徴するという側面からそれぞれの伝統演劇のもつ特性について分析を進めた。

また、「昆劇研究者からみた昆劇の身体、能の身体」と題して、日中双方の著名な昆劇研究者赤松紀彦（京都大学大学院教授）、傅謹（中国戯曲学院教授）による研究発表を行った。

全体討論においては現代演劇の研究者、実演家も交えながら、双方の伝統演劇のもつ「空間性」、「文学的要素」についての問題提起がなされた。技術ワークショップ交流、研究交流では、その「身体性」を中心に調査と比較研究を行ってきたが、「能」と「昆劇」という2つの伝統演劇のもつ「空間」と「テキスト（ことば）」についての新たな研究の拡がりを感じさせる。これはこの研究シンポジウム開催にあわせて発表された能と昆劇による現代演劇作品『The Spirits Play・靈戯』（演出：佐藤信/ダニー・ユン）の上演から、双方の伝統演劇を比較する上で「空間」と「テキスト」という要素に焦点をあてる必要性が浮かび上がった結果でもある。

2013年度は、これまでに行ってきた研究の総括として、活動の成果をまとめた記録論文集を刊行した。また、2月には関係者が一堂に会しシンポジウムを開催し、研究の締めくくりと、これからの「能」と「昆劇」の発展にむけた提言を行った。

伎楽面の総合的研究及び復元模刻制作

研究代表者：藪内佐斗司（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室教授）

研究分担者：仲裕次郎（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室教授）、鈴木篤（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室教育研究助手）、中村志野（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室教育研究助手）

【研究目的】

伎楽は中国南方の呉からわが国に伝えられ、飛鳥、天平時代に盛んに行われたが、次第に衰退していったために、いまだ解明されていない部分も少なくない。東大寺をはじめとして、法隆寺、正倉院、春日大社、叡福寺等には、伎楽に用いた伎楽面が今も数多く残されており、日本の演劇史を研究するにあたって不可欠だけでなく、後世のほかの仮面とは異なる特徴を持つなど、その独特の造形は日本彫刻史においても重要な位置を占める。現在東大寺に所蔵されている39面の伎楽面の総合的な調査研究を行うことで、制作当初の状態を目指した精巧な伎楽面の復元模造を試み、木彫技術や彩色技術といった制作技法の解明を目指す。

【研究成果の概要】

平成25（2013）年度

平成25（2013）年度の研究においては、正倉院蔵・伎楽面「波羅門」を、写真測量による等高線図といった既存資料を用いて、推定される当時と同じ材料、技法で再現していることに大きな意味を持つ。3Dデータを用いて導き出した推論が、制作という実技を通じて確信へと変わることこそが、本研究のテーマである総合的研究の本質である。

今回の制作作業においては、1972年発行の『正倉院の伎楽面』に掲載されている等高線による測量図（正面、右面、左面）を参考にした。しかしこれらの図は模刻に必要な木取りの向きとは異なるため、今回この等高線図を用いて、一旦コンピュータ上で3Dモデル化を行うことで、目的に沿った図面の制作を試みた。

3D化の手法としては、まず断面図をPC上でトレースすることによって、ラスター情報をベクター化した後、断面線のそれぞれの線に対して高さ情報を与え（線間2.5mm）、メッシュ化することで、正面、右面、左面三種類の3Dモデルを作成した。これらの作業によって、伎楽面「波羅門」は任意の視点で表示し、木取りに合わせた必要な図面を作成することが可能になった。

また入手した写真から頭頂部、顎部の部分に木芯が通っていることが確認されるため、桐の丸太から木取りを確定させ、また3Dデータから仮想的に木目を生成し、写真で見られる木目に近付くことが確認できた。そのためデジタルデータから必要に応じた寸法や図を用いることで効率良く彫刻作業を進めることが可能になった。また実物では欠損している部分については、今回当初復元を目指すため、形状を復元した。

彫刻作業がほぼ終了したので、今後彩色作業を行う。全体に黒漆を塗り、白土を塗り、その上に顔料を塗っていき、植毛等を行い完成とする。

今までにも復元した伎楽面の事例は多く見られるものの、今回の大きな特色としては、既存の断面図といった資料から3Dモデル化したことである。このことによって模刻の幅は大きく広がることになり、今後の伎楽面の模刻においても適用できる手法であり、ひとつのケーススタディとしてもたいへん貴重である。

【研究成果の総括】

4年間で法隆寺に伝わる飛鳥時代の「呉公」（現東京国立博物館蔵）、東大寺蔵の「酔胡王」、正倉院蔵の「崑崙」、「波羅門」といった伎楽面4面の復元模造を行った。実際に復元したものをみると、それぞれが個性豊かな造形や鮮やかな色彩を持ち、従来我々が抱いていたイメージを刷新するものであることがよくわかる。今回実制作を通して生み出された成果や研究の意義についてここにまとめる。

「呉公」は法隆寺金堂四天王像、百済観音菩薩像といった法隆寺における飛鳥時代を代表する彫刻の雰囲気をよく留め、また宝冠装飾の意匠も類似点が多い。またこれらの仏像と同様に樟材を用いられているが、東大寺、正倉院のものは通常仏像では用いることのない桐材で作られている。飛鳥時代においては仏像と同様に作られていたものが、天平時代になるとより軽い桐材を用いることで、制作においても実用性を重視するようになったのではないかと考えられる。

仏教彫刻の制作技法と異なる点としては、頭髪や髭の表現として、馬の毛を用いて毛貼り、植毛をするといった見た目の表現上のリアリティの探求がある。通常これらの表現は仏教彫刻にはみられず、信仰の対象という意識より、伎楽という演劇で魅せるといった意識のあらわれであるとも考えられる。

彩色は伎楽面の見た目を大きく印象付ける要素でありながら、表面に残る彩色はどの伎楽面においてもわずかなものであり、最も苦労した点のひとつであった。そのため同時代の多くの作例を調査し、写真、文献をくまなく調べ、検討材料となる情報収集に力を注いだ。そして実際に手板等で下地や彩色のテストを行い、最適な方法を検討した。そしてこれらの結果から彩色を施し、想定復元を行った。

研究は面部に限ることなく、特に「呉公」においては宝冠装飾や後頭部から頸部を覆う布も復元の対象とした。これによって美術品としての一面だけでなく、実際に伎楽に使用するための一面を大きく浮かび上がらせた。

実際の制作に役立った重要な点のひとつが、コンピュータによる3D技術を大きく活用したことである。「酔胡王」、「呉公」は実際の面を3Dスキャナーによって計測して、その形状を記録し図面を作成した。一方「崑崙」、「波羅門」においては既存図面（等高線図）から3Dデータを作成することで、模造するにあたって必要な図面を新たに作り得た。デジタル・アナログ情報を双方向に利用することで、より確度の高い模造が行われたと確信している。

仏像を中心とした日本彫刻史では、伎楽面をはじめとする仮面に焦点が当てられる機会は少ない。しかし、伎楽面の造形や構造、素材の変遷は日本彫刻史と共通する部分も多い。伎楽面のような仮面彫刻の研究は、日本彫刻史に新たな知見をもたらす可能性を秘めており、今後も総合的な研究を進める事が彫刻史全体への寄与に繋がると考えられる。

テーマ研究

9

寺山修司の創作～一次資料から明らかにする活動実態～

研究代表者：岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：竹本幹夫（早稲田大学文学学術院教授）、梅山いつき（日本学術振興会特別研究員）

【研究目的】

本研究は寺山修司の創作について、演劇博物館が所蔵している関連資料と、寺山の秘書を長年務めておられた田中未知氏が所蔵する資料をもとに明らかにすることを目的としている。演劇博物館は主に書籍や映像資料、チラシやパンフレット類、そしてわずかではあるが台本と手稿を所蔵している。ところが多岐にわたる寺山の創作活動の実態を明らかにするには種類が限られており、寺山の創作活動の全体像をつかむにはいささか困難な状況にある。そこで本研究では、田中氏がお持ちの資料を参照させていただくことで、作品の制作過程の詳細を調べる。

【研究成果の概要】

平成25（2013）年度

2013年4月から2014年3月まで、演劇博物館に田中未知氏の寺山コレクションが寄託される運びとなり、資料の大部分がオランダの田中氏の自宅から演劇博物館に移送された。演劇博物館は寄託を記念し、企画展「いまだ知られざる寺山修司」展を11月26日から2014年1月25日にかけて開催することになった。そうした動きを受け、本研究では移送された資料を用い、特に10代、20代の頃の初期活動に関する資料を調査した。

初期作品は俳句、短歌、詩などの文学作品、ラジオ、テレビ、映画といった放送作品が中心を占める。寺山の初期文学作品については、田中氏が近年調査に力を注いでいる分野である。そこで、企画展開催期間に2度ギャラリートークを開催し、初期文学作品について、寺山と言葉という観点からお話いただいた。大学中退後、寺山は放送作家として歩み始めるとシナリオライターとして数々の賞を受賞する。シンポジウム「いまだ知られざる寺山修司ードキュメンタリーとフィクションのはざまから」では、今野勉氏（テレビマンユニオン取締役最高顧問）をはじめとするテレビ業界で第一線を走るプロデューサー、研究者をお招きし、寺山が構成したテレビ番組の実験性や社会的意義について検証した。

本研究は寺山がどういった過程を経て作品の完成に至ったかを調査するものだが、そのためには実践の立場からの検証も必要である。そこで、演出家・劇作家・作家である宮沢章夫氏と批評家・佐々木敦氏、そして本研究代表者・岡室による鼎談「テラヤマシュージ・リローデッド!」を開催し、寺山の演劇理論と創作手

法をめぐって議論し、その今日的意義を確認した。また、初期演劇作品『毛皮のマリー』を演出家・桐山知也氏の指導のもと、早稲田大学の学生と作品分析を行い、その成果報告としてリーディング公演を開催した。

今回調査対象としたのは、寺山の創作において原点に位置する作品群であり、言葉を表現手段にしていた時代にあたる。俳句から出発し、放送作品、そして後に演劇へと表現手段は変容を遂げていくが、言葉は創作の重要な一要素であり続けた。プライベートなものとして書き綴っていたノート類やスクラップブックの調査からは、どういった思想や作品から影響を受けて文体が形成されたのか、またどのような交友関係が寺山の文章を育てたのかの一端を知ることができた。このように本年は資料調査に加え、有識者を招いた研究集会を開催することで検証を深めると共に、研究成果の一般公開を行った。

【研究成果の総括】

本研究は2012年に公募研究としてスタートし、本年度までの2年間に渡って進められた。

<2012年度>

10月から11月にかけて田中氏の自宅へ赴き、上演・上映回数が多かった演劇・映画作品を中心に約600点の関連資料の調査を行った。その結果、田中氏所蔵の資料は主として舞台上演に際し用意された箱書き、香盤表、映像作品ではスクリプトやラフスケッチ、関係者間で配られた企画書等であり、演劇博物館所蔵資料の不足を補うには余りあるほど価値の高い資料であることが明らかとなった。演劇実験室・天井桟敷はいち早く海外公演を勢力的に行った集団である。『人力飛行機ソロモン』や、本調査でも取り上げた『毛皮のマリー』などは上演国でオーディションを行い、現地の人びとを巻き込む形で上演された。それ以外の作品においても寺山は集団による共同制作を重んじており、即興性を重視した。そのことは寺山の演劇論から明らかではあるが、実際には入念な準備と精緻な構成の上に共同作業は存在していた。田中氏の手元に残された細かな場面指定からなる箱書き等の資料がそれを裏打ちしている。

<2013年度>

上に記載の通り。

本拠点の研究資源の有効利用を前提とする研究テーマを一般に公募して、審査・採択された研究テーマに共同研究の場と研究資料を提供するものです。(研究期間:1年間)

研究代表者・分担者の肩書きは、年度末の成果報告時のものであり、現在の所属とは異なることがあります。

公募研究

1

「本朝話者系図」の基礎的研究

研究代表者：今岡謙太郎（武蔵野美術大学造形学部教授）

研究分担者：高松寿夫（早稲田大学文学学術院教授）、中川桂（二松学舎大学文学部准教授）、金井隆典（早稲田大学政治経済学部非常勤講師）、瀧口雅仁（恵泉女学園大学人文学部非常勤講師）

【研究成果の概要】

本資料に記載される芸人の人名はのべ人数にして二百数十名にのぼる。しかし同一人が別々の芸名で複数記載される。あるいは師弟の系統別の分類によってやはり複数記載される事例が多々見受けられる。

基礎作業としてこれら重複して記載された人名の同定作業に着手したが、この作業の中から当時の落語家における「一門」意識の実態をある程度解明することが出来た。例えば初代五明楼玉輔の事例では「古 玉輔 初馬生門。子細在て。講師桃林亭東玉と。立川両門人となる」また「一 二世焉馬東玉両門 五明楼立川玉輔 初周光と云講師也。馬生ノ門ニ入て馬長又馬風又二代馬生」と同一人ながら初代金原亭馬生、二代目立川焉馬、桃林亭東玉の3人の門下として記されている。特に焉馬、東玉の「両門」とされている点など、近代以降の落語家に見える門弟意識とは明らかに異なったものと考えられる。

これに関連して、幕末期における落語家の師弟意識には、烏亭焉馬の流れを汲むいわば戯作者系とも呼ぶべき師弟意識と、近代以降の落語界に見られるような師弟意識とが併存していることがある程度明らかになった。前者の端的な例は初代桜川慈悲成と思われる。慈悲成自身について本書は「狂歌に長ず」とした上で中

絶した焉馬の「咄の会」を再興した人物と紹介し、門弟として「友成」「桃成」「清成」とその狂歌の門人名を列挙する。これは狂歌の弟子としての名前を挙げたもので、芸人として師弟関係ではない。興味深いのは同じ部分の末尾に「今桜川をつける者素人咄と云なり」との記述が見える点で、いわゆる職業的な落語家とは別系統での師弟意識があったことを伺わせる。

また一方、職業落語家の祖ともいべき初代三笑亭可楽に関する記述からは職業落語家としての意識を強く伺うことが出来る。初代可楽に関する記述では、まず門弟として「門人十哲」と一家をなした芸人を列挙する一方で、それに続いて「門人席順」として十三人の名を挙げ、更にその後「新入門ノ人」また「可楽門人門葉」と題して門人の名を列挙している。「門人門葉」に関する記述では、二代目可楽の項に「二代可楽の名跡、連中のすゝめによつて相続。中間惣支配。名人三幅対の一人也」といった記述も見え、こちらはむしろ現在の落語家に近い意識であったことを伺わせる。

以上のような例は本研究のほんの一端に過ぎず、「話者系図」の全容解明にはほど遠いと言わざるを得ない。今後更なる検討を重ねることによって落語家における職業意識、一門意識の形成、また社会における寄席芸人の位置づけなど様々な成果が期待できる。

公募研究

2

東西演劇交流におけるメディア・記憶・アーカイヴをめぐる研究

研究代表者：上田洋子（早稲田大学文学学術院非常勤講師）

研究分担者：永田靖（大阪大学教授）、太田丈太郎（熊本学園大学教授）、内田健介（千葉大学研究員）、斎藤慶子（早稲田大学文学研究科博士課程）

【研究成果の概要】

本研究では2011年度の共同研究（「近代日露交流とその文脈」）の成果をふまえ、その研究の中心となった演劇博物館所蔵資料「歌舞伎貼りこみ帳」に関する研究を継続・発展させた。1928年、二世市川左團次一座は初の歌舞伎海外公演をソヴィエト連邦のモスクワとレニングラードで行った。役者だけでなく舞台装置までもソヴィエトの舞台上に再現した大掛かりな二世市川左團次一座の公演に対して、ソヴィエト国内では公演前から各新聞・雑誌に様々な歌舞伎に関する記事があふれかえり、公演中にも多くの批評家や演劇人による歌舞伎に対する論評が執筆された。それら大量の歌舞伎に対する記事はスクラップブックにまとめて収められ、ソヴィエトから帰国する左團次に贈呈された。そして、帰国した左團次は、この貼りこみ帳を同年開場した早稲田大学演劇博物館に資料として寄贈している。ここには273本のロシア語新聞・雑誌記事、64枚の写真がスクラップされており、国家事業としての演劇招聘に関するソ連側の紙媒体による報道の全体像を概観することができる。

本年度では、まず全273記事の翻訳を完成が大きな成果である。そして、記事と共に収められていた64枚の歌舞伎役者の写真に関しても協力者である児玉竜一先生のお力を借りて、人物や

演目・役柄などを大部分の写真の詳細を特定することができた。これらは本研究の成果として演劇博物館のアーカイヴでの一般公開される予定で、それに向けて準備を進めている。

また、翻訳された記事には当時のソヴィエトで使われていたジャーナリズムにおける専門用語や、歌舞伎の用語のロシア語への翻訳に関する問題など、いくつか翻訳者全員で協議をしながら修正を行わなければならない点があり、その解決のため今年度は本研究会では繰り返し翻訳者同士による協議を行い、その結果をふまえ翻訳の修正を行った。

また、研究代表の上田洋子によってロシアの資料館に保存されている当時の新聞・雑誌の研究調査が行われ、貼り込み帳に収められていない歌舞伎に関する新たな新聞記事の発見や、貼り込み帳に収められていた記事がどのような状態で新聞に掲載されていたのか（貼り込み帳には切り抜かれた状態で収められているため新聞の何面にあるかなどは判別できない）を確定させることができた。こうした貼り込み帳に収められなかった記事の翻訳や歌舞伎の記事の紙面における扱いに関しては、本研究の分担者・協力者の研究成果を論考としてまとめた『歌舞伎と革命ロシア』において最終的な成果として発表される予定である。

公募研究

3

吉田文庫所蔵資料悉皆調査と近代能楽研究史の解明

研究代表者：江口文恵（法政大学能楽研究所兼任所員）

研究分担者：竹本幹夫（早稲田大学文学学術院教授）、中尾薫（大阪大学文学部専任講師）、青柳有利子（日本学術振興会特別研究員）

【研究成果の概要】

本年度は8・9・12月の三回にわたり、新潟の吉田文庫で現地調査を行った。8月と9月の調査では、明治期の小謡本を含む、近代の版本、刊本、吉田東伍自筆ノートを中心に調査したほか、吉田東伍と早稲田大学関係の写真約20点が管見に入った。大隈重信や歴史地理学科卒業生らとの写真が中心で、本学の大学史料センターのデータベース写真と照合したところ、一致した写真はなく、学内でも存在を把握していないものである可能性が高い。これらは同センターに報告し、調査の協力を仰ぐつもりである。

12月調査では、東伍の講演原稿や明治期の観世流謡本、能・浄瑠璃関係の刊行本などが主な調査対象であった（一部再調査を含む）。中には東伍の著書『宴曲十七帖 謡曲末百番』『宴曲全集』が複数冊含まれており、多くの未使用本に混じり、東伍自筆と思われる朱の書き入れや貼付資料を有する本が管見に入った。先に出版された『宴曲十七帖…』への書き込みは、後の『宴曲全集』に生かされた可能性も考えられる。東伍の宴曲研究の過程が窺えた。

また、昨年度に調査した東京大学史料編纂所蔵『観世累葉履歴』抄本（吉田東伍蔵本の写し）の複写を申請し、写真を入手した。『観世累葉履歴』は江戸中期に成立した、観世大夫家歴代の家系図で、観世文庫所蔵本が最善本である。編纂所本の奥書から類推するに、東伍はどこかで『観世累葉履歴』を閲覧する機会を得て、写したものを編纂掛に貸し出したはずである。しかし、現在の吉田文庫には、大正三年に当時の帝国大学史料編纂所掛に同書を貸した際の礼状はあるものの、冒頭部分を引用した自筆ノートが残るのみで、現物は確認できずにいた。編纂所蔵本は、十三世観世大夫重記までの記事を抄写したもので、省略こそあるが、現時点では未見の吉田東伍蔵本の内容を、恐らくほぼ忠実に伝えていると思われる。余白に「家譜云…」と、別の家系図と校合した痕跡があり、東伍が複数の資料を収集し、そこから観世大夫家の系譜を把握しようとしていた姿勢が窺える。

今年度の調査では新たな資料が見つかり、収穫が多かった。悉皆調査完了とはいかなかったが、今後も新資料の出現が期待できる。

公募研究

4

『ポルティチの唾娘』の復元をめぐるブルーバード映画の多角的な研究

研究代表者：小川佐和子（京都大学人文科学研究所助教）

研究分担者：小松弘（早稲田大学文学学術院教授）、川島京子（早稲田大学文学学術院助教）、森佳子（日本大学非常勤講師）、シェリー・スタンプ（カリフォルニア大学映画デジタルメディア学科教授）

【研究成果の概要】

- 『ポルチシの唾娘』をはじめとするロイス・ウェバー監督作品の特集上映会実施

東京国立近代美術館フィルムセンターにおいて、無声映画に音楽伴奏などを付けて上映する毎年恒例企画「シネマの冒険 闇と音楽」にて、『ポルチシの唾娘』を目玉としたロイス・ウェバー監督作品のレトロスペクティブを実施することができた。D・W・グリフィスと並ぶアメリカ映画初期における先駆的な女性映画監督であるロイス・ウェバーは、近年、世界的に再評価の機運が高まっており、2012年に国際的な映画復元映画祭であるポローニャ映画祭にて初めての回顧上映がされたが、今回の特集はそれに基づき、日本において本格的なウェバーを紹介する初めての機会となった。6日間で、ロイス・ウェバーの1910-20年代の作品計11本（6プログラム）を連携拠点の予算およびフィルムセンターの協力で上映。本研究課題の参考資料として作成した字幕、および研究協力者のジョン・スウィーニー氏による『ポルチシの唾娘』のオペラ音楽と映画の場面がどのように対応しているかといった調査結果に基づく音楽伴奏の実施（伴奏は柳下美恵氏であり、今回のパフォーマンスのためにスウィーニー氏から多大な資料を頂い

た）、ブルーバード映画の金字塔である『毒流』の弁士上映など、当初期待していた以上の上映会としての成果を上げることが可能となった。また、今回の上映の実現に当たっては、イギリスのブリティッシュ・フィルム・インスティテュート、アメリカの議会図書館、イタリアのポローニャ映画祭と、国際的な協力関係も深めることができた。

- 公開研究ワークショップの実施

上記フィルムセンターでの上映会に加え、早稲田大学において公開研究ワークショップ（『ポルチシの唾娘』と初期ハリウッドの女性監督ロイス・ウェバー）を実施し、各分野の専門家による報告と、センターでは上映されなかった分担者の小松弘氏所蔵の16mmフィルムの参考上映を行った。ワークショップでは、ロイス・ウェバーを長年研究されてきたカリフォルニア大学のシェリー・スタンプ氏に講演をして頂いた。スタンプ氏の日本出張に合わせて、東京首都大学との共催のもと、別の議題（『暗黒鬼』：初期ハリウッドにおける避妊、映画、検閲）でロイス・ウェバーの講演も実施した。『ポルチシの唾娘』をめぐる、他分野からの多様なアプローチの端緒を開くことが期待できる。

公募研究5 人形浄瑠璃の現有曲目に関する資料学的研究—淡路・阿波・大阪の伝承を中心に—

研究代表者：神津武男（早稲田大学高等研究所招聘研究員）

研究分担者：山田智恵子（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）、久堀裕朗（大阪市立大学文学部准教授）、中西英夫（南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館館長）、松下師一（松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館主任学芸員）

【研究成果の概要】

「義太夫節の曲数は、どれほど残っているのか。」本研究課題の究極的な目標は、義太夫節の現有曲目の実数を明らかにすることにある。その前提として、今年度採択を得た範囲では現有曲目数を考究するに当たっての資料整備を行なう点に主眼を置いた。

浄瑠璃本の内、「通し本」（作品全体の本文を記す）の残る作品は、630を数える（神津武男著『浄瑠璃本史研究』参照）。これが義太夫節の作品数を考える際の大本となるが、初演限りで再演されなかった作品も多く、伝承曲数を考えるには絞り込む必要がある。では何に拠って絞り込むか。本研究課題では、「抜き本」（一段一場の本文を抜き書きにする）の残る作品に照準を合わせた。抜き本は俗に「稽古本」と称されるなど、義太夫節伝習の教本と捉え得る資料である。また義太夫節の演奏においては「床本」（内容は抜き本と同じ。筆写本）を必携することから、逆説すると、「抜き本」「床本」の存在は、直ちに伝承曲目である／あったことの証左となる。

淡路・阿波に伝承された曲目を、当該地域に伝存する「抜き本」から想定することを目指して、南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館（淡路）、松茂町歴史民俗資料館（徳島）の収蔵本のリスト化を進めた。伝存本の調査と同時に、かつて出板された概数を特定して、その範囲を絞り込んだ。「外題目録」（出板目録）に記載する作品をデータベース化することにより、かつて抜き本として出板された作品を、276と数えた。竹本駒之助師への聞き取り調査においても当該外題目録記載作品のリストを基にお話を伺った。

日本国内に残存する通し本は2万3千冊余であるのに対して、抜き本は数倍するものと予想するが未踏査の領域であるため、全体像の把握に至る道筋すら見定め難い。またこれまで義太夫節の現有曲目に関する調査は、技芸者への聞き取りを主として行われてきた。これら従来の接近方法とは異なる、新しいアプローチの仕方の提案と、各所蔵機関における抜き本の整理に有用な外題目録記載作品データベース（作品同定のツールとなる）を作製し得たことが本研究課題の、今年度の成果である。

映像から見る戦前戦後の宝塚

研究代表者：児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：阿部さとみ（群馬県立女子大学講師）、川崎賢子（日本映画大学教授）、桑原和美（就実大学教授）、山梨牧子（法政大学国際日本学研究所研究員）、仁井田千絵（日本学術振興会特別研究員）、ノルドストロム・ヨハン（早稲田大学文学研究科博士課程）、石坂亜希（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）

【研究成果の概要】

現時点での成果物としては、日比谷における宝塚劇場を中心とする劇場文化を考察した、11月16日イベントにあわせた冊子、6月23日の日本演劇学会シンポジウムにおいて発表した映像についての分析が、学術的成果として挙げられる。しかし、本研究は、宝塚文化を支える広大な裾野にも届くべく構築されたところにも特色があり、発掘された映像をより広範な階層に届けるべく、発掘映像を核としたドキュメンタリー映像を作成している（1月14日のイベントで公開）。

これらに通底するのは、宝塚を研究するための様々な方法の確認作業と、それにもとづく試行錯誤であり、実際のところ宝塚歌劇研究は、現在の舞台の愛好者が、その愛を持って余すあまりに時間を遡行し、学術的な味付けを施して宝塚愛を語ろうとするものが少なからぬ部分を占めており、すでに確立されたアカデミズムとのすり合わせの中での試行錯誤が今後も続くものと推測される。その点、本研究の特色は、映像という確たる資料をもとに、

文学・美術・都市論・文化論にも造詣の深い川崎賢子氏を筆頭に、音楽学、宝塚研究、日本舞踊、日本演劇、様々な角度からの検証によって、宝塚を戦前のモダニズム文化の中で取り上げる意義と、戦争直後の映像が残されているという事実そのものが示す歴史的な価値を再確認した上で、今後の研究に資することを目標に掲げているところにあると思われる。

残された映像断片からさえ、当事者の記憶はふんだんに紡ぎ出されること、舞踊研究者からは振付家による作家性を検証する資料となりうること、片や日本舞踊研究者からは宝塚レビューにおける日本舞踊という、西洋近代と伝統日本の狭間に立つ興味深い案件であること、など、様々な論点を引き出すことができた。GHQが戦争直後にこれを撮影したこと自体の、異文化交流の視点と、検閲と干渉の政治学的興味もまた、宝塚を主題とする戦後映画や戦前のPCLとの活動を併せ見ることによって、重層的な意味合いを帯びてくることが確認される。

公募研究

7

上山草人資料を活用した日米露の比較映画史研究

研究代表者：羽鳥隆英（早稲田大学演劇博物館助手）

研究分担者：板倉史明（神戸大学大学院国際文化研究科准教授）、上田学（日本学術振興会特別研究員PD）、谷口紀枝（早稲田大学文学研究科博士課程）

【研究成果の概要】

①上山草人資料のデジタル化、データベース化、関連資料の新規収集については、チーム内での研究会等を通じ、演劇博物館の既存のデータベースを精緻化するとともに、資料の体系的なデジタル撮影を進めた。貴重な資料の経年劣化等に鑑みれば、現時点でデジタル化を実施し、将来の学術利用（館内閲覧等）に供する準備を整えた意義は大きい。同時に、先行言説を体系的に精査し、研究補助者による上山関連の文献データベースも作成中である。また、新規に上山出演のハリウッド映画のDVD等を購入した。来年1月末の塚田幸光教授（関西学院大学／ハリウッド映画史専攻）の講演を軸とする研究会に向け、活用中である。②演劇博物館の過去の事業（21世紀COEやグローバルCOE等）では研究実績が比較的手薄なハリウッド映画史関連の資料、研究成果の蓄積については、上記の研究会等を通じ、成果を発信し得るよう、準備中である。③公開講演を通じた映画制作の現場との連携強化、新鮮な研究方法の模索については、本報告を提出後の12月8日（日）、映画作家諏訪敦彦氏の公開講演が無

事に実現の見込である。諏訪氏が演出を手掛けたTV番組『異端の人・上山草人』（1995年）の上映と併せ、研究代表者羽鳥が聞き手を務める講演では、フィクションとドキュメンタリの相互浸透という、上山にも諏訪氏にも重要な主題を掘り下げる予定である。④研究会や論文等を通じた成果の公表については、上山の訪ソ旅行資料のデータベース化に協力を要請したフィodorワ・アナスタシア氏（日本学術振興会DC／日露比較映画史専攻）を中心に、日露映画交流史の文脈での新知見が期待されるほか、上山が吉良上野介役で出演した松竹映画『忠臣蔵』（衣笠貞之助監督、1932年）に日活映画『赤垣源蔵』（池田富保監督、1938年）の山場が挿入された変則的な映画『大忠臣蔵』（上記6月28日の研究会にて特別映写）について、羽鳥が映画の二次利用における再編集の問題を念頭に考察した。最後に⑤羽鳥が担当する演劇博物館の常設展示「映像」での上山草人資料の紹介については、2013年度前期「早稲田所縁の映画人」特集（4月 - 8月）の一環で上山を取り上げ、大学博物館としての意義を果す展示を実施し得た。

公募研究

8

19～20世紀アジアの舞台娯楽における西洋演劇の影響に関する研究—日本宝塚歌劇・中国越劇・台湾歌舞劇—

研究代表者：細井尚子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）

研究分担者：邱坤良（台北芸術大学戯劇学系教授）、中野正昭（明治大学文学部兼任講師）

【研究成果の概要】

宝塚歌劇に関しては歌劇団発信の資料・情報以外の、主として新聞紙上等に掲載された小林一三の発言などから、当初の宝塚歌劇には利益獲得のための興行戦略があったことが明確となり、興行の商品として誕生した松竹歌劇が「少女」性ゆえに改革の幅を自ら規定したと合わせ、従来非営利・営利の二極に位置するととらえていた両者がありようとしては非常に近づいていたことが分かった。台湾は、邱氏に拠る重要な台湾の文化的特徴の指摘（中国から台湾に移植された無形文化が女性演者によるものにも変わる傾向をもつなど）もあり、台湾の文化環境から歌舞劇を分析する視点を得るとともに、日本の「少女歌劇」系芸態を手本として形成された代表的な歌舞劇団である拱楽社歌舞劇団、芸霞歌舞団の資料収集、関係者インタビューの蓄積が進み、両者の相違点も明確になりつつある。台湾歌舞劇関連は聞き取り調査が予想以上に順調に進み、また現地の研究者と連携し、その研究蓄積を活用できる形も整えることが出来た。中国越劇に関しては、

現地に赴き新たな資料・情報を収集する機会を設けられなかったが、代表者が従来より協力関係をもつ越劇を専門的に研究するグループとの研究交流、情報交換を行い、現状の把握に努めた。台湾歌舞劇における「西洋」である日本の「少女歌劇」系芸態の受容の仕方が明確になるにつれ、中国越劇との属性上の相違も明確化しつつあり、今後韓国、沖縄を比較対象に加えることで、「非西洋」がどのように「西洋」を用いて「近代」の無形文化として自己表象を行ったのかを、具体的にしていくことが可能となった。また、日中韓三国の無形文化を対象とする研究界に存在する、西洋独自の理論・分析法によるアジアの無形文化研究に対する疑問を共有し、東アジア文化圏の大衆文化研究を行う拠点・組織を台北芸術大学に設置する準備に着手した（近年の日中韓の政治的状況が、三国の共同研究活動にもたらす影響を抑え、東アジア大衆文化研究として展開していくために、台湾に拠点を設けることは非常に有効と考える）。

昭和期日本における幻灯（スライド）の復興と再発展— 「教育」と「運動」のメディアとしての製作・流通・運用に 関する実証的研究を中心に—

研究代表者：鷺谷花（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）

研究分担者：鳥羽耕史（早稲田大学文学学術院教授）、岡田秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、紙屋牧子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、坂尻昌平（日本大学芸術学部非常勤講師）、田中範子（神戸映画資料館支配人）、谷合佳代子（大阪産業労働資料館館長）、土居安子（一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団主任専門員）、安井喜雄（神戸映画資料館館長）、吉原ゆかり（筑波大学人文社会科学研究所准教授）、李正旭（高麗大学文科大学日本文学非常勤講師）、ロバート・ティエルニー（イリノイ大学准教授）

【研究成果の概要】

前年度に大阪国際児童文学振興会より寄贈を受けた幻灯1500点のうち、説明台本の欠けていた奥田商会製作の幻灯については、奥田商会現社長の奥田美徳氏のご厚意により、ほぼ全ての説明台本の寄贈を受けることができた。奥田商会製作の幻灯のうちには、昭和初期にアニメーターとして活躍した木村白山が作画を担当したフィルムが複数含まれており、白山の戦後の消息は不明のため、アニメーション史的にも貴重な資料と考えられる。奥田商会製作幻灯のうち、木村白山作画『如是姫』を、6月17日に早稲田大学大隈記念タワー地下多目的講義室で開催した「幻灯試写会」にて公開した。

前年度に熊本学院大学・水俣学研究センターによる所蔵を確認した、東大セツルメント川崎こども会製作の幻灯『自転車にのってったお父ちゃん』を、所蔵元の水俣学研究センター及び原著作者の加古里子氏の許諾を得て、複製・ニュープリント化し、「夏の夜の幻灯会2013」及び「幻灯の映す家族」にて上映した。また、東大セツルメント川崎こども会における幻灯創作・上映活動について、加古里子氏に書面によるインタビュー調査にご協力いただいた。

2013年8月18日にエル・おおさかにて「夏の夜の幻灯会2013」

を開催、戦後社会運動・労働運動に関連する4作品を上映した。また、2013年10月12日に、山形国際ドキュメンタリー映画祭2013《やまがたと映画》の公式プログラムとして、「幻灯の映す家族」と題する上映プログラムを山形美術館にて上映、『自転車にのってったお父ちゃん』及び山形の農家をモデルとする『嫁の座』のニュープリント版を含む5作品を上映した。当日、会場には、60年前に『嫁の座』に出演されたご家族も来場し、ほぼ満場の盛況となった。

2013年9月12～14日に、福島県・山形県におけるリサーチを実施、福島大学松川資料室にて、松川事件支援運動に関連して作られた一連の幻灯のフィルム及び台本の調査を行い、また、敗戦直後から幻灯上映活動のボランティアを続けてこられた川本年邦氏への聞き取り調査を実施、同氏より占領期に制作された幻灯『シュンボシオン島』のフィルム及び台本の寄贈を得た。山形県では『嫁の座』に出演された阿部ご一家に、出演・製作事情についての聞き取り調査を行った。

神戸映画資料館に所蔵されている主に1950年代の労働運動・社会運動に関連する幻灯フィルム及び台本の整理・目録化作業も完了に近づきつつある。

過去の公募研究一覧

平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
<ol style="list-style-type: none"> 1. 江戸歌舞伎台帳の翻刻研究 2. 明治・大正期の狂言資料の研究 3. 無形文化遺産の音声記録研究 4. 坪内逍遙に関する研究 5. 満州における演劇・映画の研究 6. 撮影所時代の日本演劇における演劇的要素の研究 7. 演劇博物館所蔵謡書の翻刻研究 8. メイエルホリド演劇論の現代的可能性の調査 9. アジアの芸能的身体表現研究 10. 日本ニュース映画のアーカイブに関する調査 11. 無声映画の復元研究 12. 19世紀末日本における大衆演劇の研究 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の記録映画受容史 2. チベット仏教圏における儀礼と日本との比較研究 3. 明治・大正期の歌舞伎興行研究 4. 河竹黙阿弥研究 5. 近代日本演劇における「西洋」表象についての研究 6. 全体主義的体制下におけるマスカルチャー研究 7. 人形浄瑠璃の復元研究 8. 初期映画の弁士研究 9. 演劇映像学に関する資料の体系的把握を目指す研究 10. メイエルホリド再考 11. 伎楽面の復元研究 12. 日中伝統演劇（能・昆劇）の比較研究 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 20世紀前半期における日本の記録映画受容全史 2. 坪内逍遙遺文の網羅的収集調査と紹介に関する研究 3. 日本映画における〈国家〉の表象と文化的〈公共性〉の構築に関する学際的研究 4. 明治・大正期の歌舞伎興行と狂言作者の周辺についての研究 5. 帝政期ロシア映画関連資料の多角的研究 6. 河竹黙阿弥の作品研究 7. 戦後映像文化史におけるオルタナティブ的实践についての実証的研究 8. 近代日露演劇交流とその文脈 9. 「鴻池幸武・武智鉄二関連資料」の公開に向けた研究・調査 10. 無声映画のフィルムとテキストの対照にもとづく相互的対照研究 11. 日本における近代音源資料アーカイブ 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 幻灯種板及び機器の画像データ作製調査 2. 日本記録映画の生成と興隆～受容史的視点からの考察～ 3. 吉田文庫所蔵調査と吉田東伍の学問の体系的研究 4. 文明戯の多角的研究 5. 「映画以後」の幻灯史に関する基礎的研究 6. 寺山修司の創作～一次資料から明らかにする活動実態～ 7. 河竹黙阿弥の作品研究 8. 近代文豪と写真・美術をめぐる基礎的研究 9. 19世紀末から20世紀前半のフランスにおける「絵描き仕事」と舞台芸術界の美学的関連ならびに人的交流をめぐる研究 10. 佐野碩と世界演劇

○お知らせ 早稲田大学演劇映像学連携研究拠点は、今年度、平成25(2013)年度が事業の最終年度となります。

演劇映像学連携研究拠点

ニューズレター
4号

2014年2月

編集：宮信明、大久保遼

発行者：文部科学省「特色ある共同拠点の整備の推進事業」による早稲田大学演劇映像学連携研究拠点

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇映像学連携研究拠点

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学早稲田キャンパス6号館221教室

TEL：03-5286-8515 URL：http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/